
七色の記憶

しゃーむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七色の記憶

【Nコード】

N5996X

【作者名】

しゃーむ

【あらすじ】

去年、某ライトノベルレーベルの新人賞に応募して一次選考まで残った作品です。このまま眠らせてしまうのはもったいないかなと思い、投稿させていただきます。

親元を離れ、単身公立高校に通う森田渉。

夏のある夜に突然、自分は死神だと名乗る少女が現れた。

そして渉は一週間の死の宣告を受けてしまう。死神の少女は、一週間の渉の行動を監視報告するためにやってきたと言う。

しかしその少女は人間らしいことをしたかったと、何かと絡んでくるわがままで食いしん坊な少女だった。

涉は死神の少女に振り回されつつも、自分の死を見つめ、そのときまでにやるべきことを成そうとする。

無事、成し遂げたと思えたが……。

全ては最後に明らかになった。

少年と死神の絆と、淡い恋愛模様を描く、ファンタジーラブコメディー。

世界一の幸運

寝苦しい、夏の夜だった。

部屋の電気も消してもう寝ようとしていたとき、アパートの部屋のドアが控え目にノックされた。

むくり、と起き上がり、枕元の目覚まし時計で時間を見ると、夜中の十二時を回った頃だった。

俺の友達にこんな時間に訪ねてくる奴なんていない。きっと誰かが部屋を間違えているんだろう。大体、友達なら携帯に連絡してくれるはずだしな。

頭からタオルケットを被り、今一度寝ようと試みる。いまだにノックされ続けているが、諦めて帰ってくれることを待つことにした。インターホンが目につかないのか、近所迷惑を考えてインターホンを鳴らさないのか。どちらにしろ、非常識な時間には変わりない。時間にして五分ほど経ったくらいだろうか。その間、休むことなくノックし続けた見知らぬ訪問者はやっと諦めて帰ってくれた——と、思った。

「こんばんは。返事がないので勝手に上がらせてもらいました」

「うおおっ!？」

えっ? ええっ!?

突然かけられた声で飛び起きる。「きゃっ」と小さな悲鳴が上がって何かがベッドから転がり落ちた。

声からすると女の子……って、ええっ!? 誰? っていうか部屋の鍵かけてたよな?

俺は慌てて部屋の電気を点け、転がり落ちた何かを確認する。

……目が合った。

やはり女の子だ。ベッドから落ちたときに打ったのか、腰をさすりながら俺を恨めしそうに睨みつけていた。部屋の中なのに、何故かブーツを履いたまま。

軽く混乱して部屋の中を見回す。間違いなく、俺の部屋だ。六畳一間の安アパート。一人暮らし。寝る前に食べたスナック菓子の袋もテーブルに放置されたまま。

じゃあ、こいつ、何だ……泥棒？

「まったく、女の子に向かって乱暴するとは。死んで後悔して下さい」

何故俺は不法侵入を果たした女の子に避難されているんだ。文句を言うのはこっちだろう。いやとにかく、状況を理解しないと。知らない女の子がいきなり部屋に現れた。文字通り、突如現れたのだ。部屋の鍵はきちんとかけてあったはずだし。

その女の子は一言で言えば、ゴスロリの格好をしていた。

黒いノースリーブのブラウスに細い赤いリボンを巻いて、赤と黒のチェックのミニフレアスカート。黒のニーハイに黒いブーツ。腕には黒いアームグローブもつけていた。全身黒づくめだった。

髪も染め直したかのような真っ黒で、長い髪が肩からウェーブがかかり胸の辺りに垂れていた。背丈は小柄で同世代かのように見えるが、どこか大人びて見える真っ黒い瞳が印象的だった。やたら整った目鼻立ちで、透き通るような白い肌のせいもあって、人形のような造形美だった。

「えーっと、あのさ、きみ誰？」

とりあえず、危険はなさそうだった。泥棒ならわざわざ起こすようなことはしないだろうし、どうにも俺に用事があるような言い草だったしな。

その女の子は体を起こして、

「ピンポンパンポン♪ おめでとうございます！ あなたは人間で初の被験者選ばれましたあ！」

わざとらしい拍手を添えて、笑顔でそんなことを言ってきた。少しかだけ、鼻にかかるような可愛らしい声。どうやら俺の質問に答える気はないらしい。

わーい、気のない喜びを表現してみた。わけわかんないけど、何

か喜ばしいことがあったらしい。ただ現状を理解してみれば、そんなことがあるわけがない。こんな夜中に押し掛けてきて、普通に考えれば怪しい限りだろう。こんな女の子じゃなかったら、即警察に通報してる。だけど、俺は今その女の子を夜道に放りだそうと考えている。気が引けるけど、こんな輩はさっさと追い出すに限る。

「じゃ、玄関はあつちだから気をつけて帰るんだよ。お母さんとお父さんが心配しているだろうから、早く帰らないとね。ほら、立つた立つた」

女の子の肩を掴んで、玄関に向かって振り向かせた。そのまま半ば強引に押して行く。女の子らしい、華奢な体だった。それならなおさら早く、家に帰さないとな。理由を正当化だ。

「ちよちよちよ、待って下さい。帰るわけにはいかないのです」

「もう夜中だし、明日も学校だし、もう寝るし、帰りなさい」

抵抗されて、さらに力を込めて押す。改めてブーツのままで部屋に上がり込んでいることが気になったけれど、追い出してしまえばそれでいい。

「し、仕方ないですね」

女の子がそう言った瞬間「のわっ！」と俺は前のめりに突っ伏した。何が起こったのかわからない。抵抗されていた力が一瞬でなくなつて、まるですり抜けたように玄関先に倒れ込んだ。

頭の上に「？」がいくつも浮かんで、振り返ると女の子が溜息をついて俺を見下ろしていた。入れ替わつたようには思えなくて、間違いないじゃなければ、たしかに、体をすり抜けた。いやいや、そんなことがあるわけない。ゆ、夢？

「な、何を……した……？」

少しかだけ危機感を覚えた。威勢は衰え、情けないことに後ずさりまでやってのけてしまう。

「そんなに怯えなくても、物理的に危害を加えるつもりはありません。まずは私の話を聞いて下さい」

淡々と言う女の子に俺は頷きだけで返事をした。

「あなたは被験者に選ばれました」

被験者？ さっきそんなことを言っていたな。被験者ってあれだろ、薬なんかの臨床実験でお小遣いもらえます、みたいな。そんなのに応募した覚えはないし、借りに応募していたとしてもこんな時間に訪ねてくるところなんて願い下げだ。

女の子は俺が黙って聞いていることを快く思っているようで、そのまま続きを話し出した。

「一週間の死の宣告を受け、あなたが死ぬまでの間でどういう行動をするのか。その観察、報告するために私がやって来ました」

……何を言っている。最近流行りの電波女ってやつか？ 死の宣告？ いきなり押し掛けて来たと思ったならそんな話しかよ。くだらない。新手の宗教勧誘か？

「あなたは一週間後に死にます」

……イライライラ。今まで黙って聞いていたけどだんだん腹が立ってきた。人の眠りを妨げておいて、こんなバカげた話を聞かせて、何がしたいんだ。

「帰ってくれ」

ただ一言それだけ。俺も我慢の限界だった。布教活動なら昼間にやれてんだ。

俺の言葉に冷たい目で見下ろす女の子を睨み返して、玄関のドアを指差し強く「帰れ！」と怒鳴った。

女の子は動こうとはせず、背中に手を回して分厚いレポート用紙の束を取り出した。バッグは持っていないように見えるけど一体どこにしまってたんだ？

「あなたの名前は森田^{もりた}渉。現在十七歳。家族構成は両親、妹の核家族。現在は親元を離れ県立中央高校に通っています」

ドクン、心臓が跳ね上がる音が聞こえた。体の熱が上がったかと思えば、すぐに冷めて、悪寒が走る。

「なっ、なん……で……？」

俺の動揺を嘲笑うかのように、女の子は続ける。

「あなたは毎朝午前七時起床。必ず先に寝ぐせを直し、テレビで占いをチェックして、牛乳をコップ一杯飲みます。それから歯磨きをして制服に着替え、七時四十分頃に家を出ます。朝食は最寄りのコンビニでパンを一つ。それがあなたのおおよその生活習慣です」

……何も、言えなかった。家の中の行動なんて、誰にも知られることのない事柄だ。それを的確に言い当てた。知っていると言った方がいいのか。どうして知っているのかなんてもう考えられなかった。ただただ混乱して、目の前でくすくす笑う女の子を見つめるだけだった。

おもむろに、女の子が歩み寄ってくる。俺は体がうまく動かず、声も出ない。女の子はそのまま俺に覆いかぶさるように迫り、端正な顔を近づけてきた。

「そして……」

妖艶な笑みを浮かべ、さらに顔を近づけて囁いた。俺は「あ……う……」と言葉にならない声を上げるだけで、抵抗もできない。こんな状況でも顔が赤くなるほど、その女の子は綺麗で、可愛かった。そしてそのまま俺に口づけ……でもしよつかとすると、ふわりと体をすり抜けた。

ぞわぞわと、全身に悪寒が走る。体同士が重なる奇妙な感覚に襲われ、息がつまりそうになる。

「私は人間ではありません」

頭の中に声が響いた。体の中に電流が走ったような、一瞬の痺れが襲う。

女の子は俺から離れて立ち上がり、また冷たい目で見下ろした。俺は詰まった息を吐き出すように「ぜえーっ！ はあーっ！」と呼吸を荒げた。

「納得していただけましたか？」

「な、何を納得……！ 誰だ！ お前は誰なんだ！」

「いろいろな呼ばれ方がありますが、わかり易く言うと死神といったところでしょうか」

し、死神？ こいつが人間じゃないってことはなんとなく理解できた。わかりたくなくても、否応なしに思い知らされた。あんな感覚、生まれて初めてだ。しかも、こいつが死神ってことは、俺は、俺は本当に……。

「お、俺はし、死ぬのか？」

「そうです」

死神は背中をまさぐって、銀色の懐中時計を取り出し俺の目の前に突き出した。その蓋を開けて見せる。針は、今の時刻を指していた。

「私はこれを『死までの道のり（ロード）』と呼んでいます。私がこのボタンを押してちょうど百六十八時間後、あなたは死にます」そう言って、死神は龍頭部分に指をかけた。その瞬間、本能が危機を感じたのか、俺は飛び起き、ロードを奪いにかかっていた。

しかしそれは失敗に終わる。さっきと同じように死神の体をすり抜け、勢いでベッドに飛び込んだ。すぐさま振り返ると、目が合った。冷たさだけを感じさせる、無感情な瞳。

「では、押します」

「ま、待つ……！」

俺が必死に手を伸ばす先で、あっさりとそれは押されてしまった。ぐにやり、世界が歪んだ。視界がゆらゆらと揺れ、全身があらゆる方向から引つ張られているようにピンと張った。でもそれはすぐに収まり、少しの吐き気と目眩だけが残った。

「うっ、うおえっ……」

「わかりますか？」

死神はまたロードを俺の目の前に突き出した。

ロードの針は規則正しく進み、盤面の小さな文字盤が『1』を示していた。

「これは一目という意味です。この数字が『7』に変わり、短針が二周したとき、それときがあなたの死するときとなるのです」

「う、うおおおおおっ！」

俺は狂ったように拳を振るった。混乱して、ただただ無我夢中でロードを壊そうとしていた。俺の拳は、死神の体もロードもすり抜け、ただ宙を切るだけだった。

「なっ、何なんだよっ！ どうして俺なんだっ！」

「ランダムです。あなたは世界一幸運な方ですよ。我々に干渉を許された、世界で唯一の人間なのですから。これは、世界でただあなた一人だけの体験なのです」

な、何が世界一の幸運だ。ランダムで実験対象に選ばれて死ぬなんて、世界一の不運じゃないか！

「ゆ、夢だよな？ な、なあっ！ 頼むからそう言ってくれっ！」

「あなたが信じようと信じまいと、私はここにいて、そしてロードは動き始めました。これは揺るぎない事実で、あなたが目にしていることも現実なのです」

その言葉を聞いて、また目眩が襲ってきた。

俺はそのままベッドに倒れ込んだ。

微かに残る意識の中で見たものは、死神の、ほんの少しだけ悲しそうな瞳だった。

一日目

目覚まし時計の音で目が覚めると、少し頭痛がした。あまりよく眠れていなかったのか、頭がぼーっとする。

昨日はベッドに倒れてそのまま寝てしまったらしい。きれいにタオルケットを被っていたけど、昨日の出来事はやっぱり夢だったのかな。

「おはようございます」

夢じゃない、よな。

俺は声のした方を振り向くことなく頭を抱え込んだ。

そして違和感を感じる。部屋の中に香ばしい匂いが漂っているのだ。

部屋の中央にあるテーブルに目をやると、トーストと目玉焼き、そしてコーヒーが並べられていた。何故か二人分。

「早く食べないと冷めちゃいますよー。あなたが起きる時間に合わせて作ったのですから」

そこでようやく真夜中にやってきた死神に目を向けた。着てきたゴスロリはそのままエプロンをつけてキッチンに立ち、そして機嫌良さそうに笑っていた。

「ええーっと、何してるの？」

「ああ、冷蔵庫の中身を使わせてもらいました」

「いや、じゃなくて……」

「先に顔でも洗ってきたらどうですか？」

当惑しているところに笑顔を向けられて、なんだか何も言えないまま洗面所へ向かった。鏡を見るとひどい寝ぐせにうつすらとクマ。自分の顔にげんなりしつつ、顔を洗ってとりあえずテーブルに着いた。「お口に合うかわかりませんが」と俺と同じようにテーブルに着いて不安そうに俺の顔色を覗う死神。

どういう展開なんだこれは。こいつは一応俺の命を奪いに来たよ

うなもんで、何故そんな奴と朝の食卓を囲まなければならんだ。

「目玉焼き、お嫌いでしたか？」

うつ……。くそ、そんな潤んだ瞳は反則だ。

「嫌いじゃ……ないけど」

俺がもしも目を泳がせていると、死神は「では……」とエプロンをまさぐり黒ぶちメガネを取り出しそれをかけた。そしてちょこんとお辞儀して、

「お召し上がり下さいませ。ご主人さま」

そう言ったあと、にっこり笑った。長い黒髪がはらりと落ちた。えーっと、これはあれか、メガネメイドのつもりなんだろうか。いや、絶対そうだ。俺に何と言って欲しいんだ。

「あ、あの……」

「やはり服もメイド服の方がよかったですか？」

「いやいや、そういう問題じゃなくて何してんの？」

「……あなたは不思議な人ですね。私のデータによると大半の人間がこれで『萌え』と言って転がりまわると……」

随分と不服そうな顔だ。一度そのデータとやらを見せてもらいたいもんだな。

「俺が聞きたいのはどうして朝食の準備をしているのかってこと！」

「私が調理師免許を持っているからです」

「えっ、ちょ、調理師？」

死神の世界にもそんなもんがあるんだ。

「嘘ですよ？」

「……あっそ」

しかし、理由はどうあれ目の前に朝食が用意されてあるのだから頂かない手はない。家で食べる朝食というのも随分久しぶりだな。いつの間にか、何故こいつと食卓を、なんて思っていたことはすっかり忘れていた。

「あっ、こら。いただきますは？」

俺がトーストに手をつけようとすると、子供をしつけるような目

で怒られた。それが何だか気恥かしくて小声で「いただきます」と呟いた。それが本当に怒られている子供のようでまた恥ずかしかったりした。

そしてトーストを一口。カリッという歯ごたえと香ばしさでもう一口と食が進む。

「いかがですか？ 目玉焼き」

「うん、まだ食べてないってわかってるよな？」

「乙女心がわかってませんね」

食べてないものをうまいなんて言えばバカにしていることになると思うのは俺だけか？ それに乙女心って。たしかに見た目は女の子だけどさ。

「死神なのに腹が減ったりするの？ ちゃっかり自分の分まで作って」

「別に食べなくても平気ですが、この方が雰囲気が出るでしょう？」

死神はそう言って、目玉焼きをトーストの上に乗せて落ちないように器用に食べる。どこか嬉しそうに。第三者からこの光景を見ればそれは仲睦まじい同棲カップルの食事シーンに見えるかもしれない。雰囲気ってそういうこと？

「いったい、何がしたいんだ？」

「私は無から生み出されました。それからここに来るまでの間、いろいろとこの国のことを調べてきました。そして、私も少し人間らしいことがしてみたいと思います。私がこの姿で生み出されたからこそ、こういう感情が沸くのもかもしれませんけど」

少し寂しそうな笑みを浮かべながらそう言った。

生み出された、か。まあ、死神が人間のように生まれるとは思わないけど。昨日も人間離れしたことを見せられて、何もなかったところから生み出されたなんて聞いても驚きはしない。逆にそれらしい、なんて思う。

それよりも、気になることがあった。

「死神にも、感情があるんだな」

死神は俺を一瞥して、すぐに視線を落とした。

「そうでない者もいます。私はこういう姿ですから。それでも感情というものがはつきりわかるわけではありません」

「他にもいろんな死神が？」

「存在します。私は一億千六百万三千八十九番目に生み出された個体です。ただ、他の個体との面識はありません。今現在、私と同じような存在がどれだけいるのかもわかりません。だから、私はあなたと交わした会話が初めての会話でした。嬉しかったんですよ？」

本当に嬉しそうな満面の笑みを向けられて思わず赤面してしまう。何も知らない、純心無垢なその笑顔は死神というよりむしろ天使のようだった。

調子狂うよな。俺はなに顔赤くしてんだか。

そのまま嬉しそうにエッグトーストを頬張る死神を眺めながら朝食を済ませた。

片付けを済ませ、制服に着替える。夏服の真っ白な開襟シャツにグレーのズボン。女子は同じ色のスカート。鞆を傍らに置いて、一年経ちだいぶ色褪せてきた学生靴を履こうと玄関先に立った。

「では、行きましょうか」

「は？ まさか学校までついてくる気か？」

「当たり前です。言っただでしょう。私はあなたを監視するためにやってきたのです」

……そうだった。天使の笑顔に騙されるところだったがいっつは死神なんだ。そして、その死神に憑かれてしまった俺は……死ぬ。

そうだ、そうだよ。俺は死ぬんだった。そんな大事なことが、頭の中からどっか行っちゃった。こんな時にまで学校なんて行ってる場合なのか？俺が死ぬまで一週間しかないんだぞ。俺が、死ぬまで……死ぬ？

「う、うわああああああああっ！」

急に怖ろしくなり、頭を抱えてその場にうずくまった。

きつと死神はどこまで行っても追いかけてくる。逃れられない。

どうすればいいんだ。俺はどうすればいいんだ！ 夢なら、夢なら覚めてくれよ！

「学校へは行かなくていいのですか？」

現実。こいつが目の前にいることが現実。滲み出る汗。地に足を付けている感覚。息苦しい呼吸。全てが本物。全てが現実。

死神は興味深そうに俺を観察するように見ている。今も震える俺のことを記録してるんだ。こいつらにしたら俺なんてただのモルモット。可哀想にとでも嘲笑ってやがるのか？

そんなの、惨め過ぎるだろ。悔しいだろ。こんな実験でモルモットになるために生まれてきたんじゃない。

観察対象として死ぬ俺。死の恐怖に狂わされていく俺。そんなのゴメンだ。

誰が——誰が思い通りになるもんか！

俺は死神を睨み、立ち上がった。

「学校に行く」

少し目を丸くさせた死神を一瞥して、部屋をあとにした。

俺はこの一週間、何も変わらずに過ごしてやる。実験なんて意味がなかったと思わせてやる。一週間後、突然事故に遭って死ぬ。突然心臓麻痺で死ぬ。突然力ミナリに撃たれて死ぬ。俺は突然死んでやる。死の宣告なんてまるで気にしてないように、突然死んでやる。たとえそれがちっちゃな抵抗だろうとも。

学校へは平坦な道のりを徒歩で十五分。まずはその途中にあるコンビニでパンを買い、表ですぐに食べた。いつもと違ったのは時間が少し遅いから行き掛けに見かける生徒の顔が違ってくるくらいだ。あとはいつも通り。

いつも通りに教室に入り、いつも通りにクラスメイトに挨拶する。いつもの時間に担任が教室に入ってきて来て、いつも通りに出席を取る。ハゲた担任が女子の夏服をいやらしそうに眺めることだっていつも

通りだ。何も変わらない。

たった一つを除いて。

一時限目の準備をしようと鞆から教科書を取り出した時、教室に学校生活に不釣り合いな格好をした奴が入って来た。そいつは困ったように右手の人差し指を口に当て、教室内をキョロキョロと見回している。真っ黒いウェーブ髪がゆらゆら揺れる、死神のゴスロリ少女。そいつが教室に現れた。

「な、何してんだ！」

死神に向かって叫ぶと、教室内の視線が一斉に俺に集中する。そんなこともお構いなしに俺はそいつを凝視していた。

「ど、どしたん？」

と隣の席の池田。こいつは一年の時から仲の良い男友達だ。

「お前、あれ見て何も思わないのかよ！」

俺は死神を指差しながら言った。すると指差した先、教室の入口に一番近い席に座っていた南さんが「え？ 私？」と自分を指差した。

「南さんがどうかしたん？」

「は？ お前、あいつが……」

死神の存在を訴えようとすると、死神は周りの目も気にせずこちらに向かってツカツカと歩いてくる。クラスメイトの視線は相変わらず俺に固定されたままだ。

そしてそいつは、俺の目の前までやってきて、やれやれと、口にした。

「最初に言っただでしょう。人間で我々に干渉できるのはあなただけなのです。周りの人間には私の姿は見えていませんし、この声も聞こえていません」

「なっ……！」

ありえる。こいつなら、そんなことだってありえる。

「おいおい涉、お前大丈夫か？ 暑さで頭ん中おかしくなったんじゃないん？」

どうやら本当に池田には見えていないらしい。よく考えればそうか。こんなゴスロリの格好した奴が学校内をうろついていたら騒ぎになるに決まってる。

「授業始まる前に保健室行った方がいいんじゃない？ 先生には言っとくから」

友達を気遣う池田のもつともな意見に軽く返事をして、クラスメイトの心配そうな目と変人を見る目に送りだされて教室を出た。

廊下の角を一つ曲がって教室のどよめき声が遠のいたとき、廊下の大きな鏡に目を向けた。足音は二人分。鏡に映るのは俺一人。鏡だけ見て歩いたら足音が襲ってくるようで怖い。

落ち着きを取り戻そうと、顔を洗うためにトイレに寄った。

「どこまでも着いて来る気か？」

「監視役ですから」

またそれか。プライバシーも関係なしだよ。

「いいのですか？ 普通に学校にいて」

お前がいること自体普通じゃないって。

「いいんだよ。俺なんか監視してても無駄だぞ。俺は何も変わるつもりはないからな。他の仕事でもしてるよ」

「これが私の唯一の仕事ですから」

ちっ、勝手にしやがれ。

しかしながら監視監視と言って付き纏われるのもおっくうだ。トイレの中にまでくっついてくるんだからな。やっぱり、死神には人間の常識なんて通用しないのか。

「もっと人間らしくしてみたらどうだ？ せっかくこっちにいるんだし」

顔を洗って、鏡を見る。死神は映っていないから独り言を言っているようだ。振り返り死神を見ると、少し困ったように人差し指を唇に当てていた。さっきと同じ仕草だけど、困ったらやる癖なんだろうか。

「もっと人間らしく、ですか」

「そう、人間らしく……お前、名前は？」

「名前……私自身に固有の呼び名はありません。一億千六百万三千八十九番目に生み出されたということくらいしか、私を特定できることはありません」

「それならお前の名前！ 名前は……」

生み出されたのが一億……えーと、聞いたばかりなのに全然わからねえ。名前……。

俺は思いついた、と言うより前から知っていた名前を、あろうことかこいつに。こんな、死の宣告をもたらした奴なんかに。

「お前は『美月^{みつき}』だ。俺はそう呼ぶからな」

「みつ……き……？」

勢いだったのかもしれない。実はやけくそだったのかもしれない。思い通りにはならないと、ただそんな抵抗の一環だった。

「美月……私は美月なのですね」

美月は嬉しそうに名前を呟き、目を細めた。

「別に喜ばせるために名前をつけたんじゃないからな」

「ツンデレですか？」

「本心だ！ なんで俺がお前を喜ばせなきゃならん！」

「お前じゃなくて美月と呼んで下さい。そもそもあなたがそう呼ぶと言ったのですから」

こいつ……むかつく。

トイレの中だったから花子にでもすればよかったかな、そんなことを思いつつまた保健室へ足を進め始めた。美月は機嫌良さに俺の隣を歩いている。

これじゃ本当に喜ばせるために名前をつけたみたいじゃねえか。しかもツンデレとか。

「美月はなんか偏った知識を持つてるよな。ツンデレとか、メイドとか」

「最近の日本の文化についてデータで学んだだけです？」

「そのデータを否定はしないが間違っていると思うぞ？」

「データを間違いと言う前にあなたの日本語がおかしいでしょう。肯定か否定かどちらかにして下さい。この一週間で日本語を勉強し直したらどうです？」

「……………イラッとした」

「奇遇ですね。私もです。データに間違いはありません」

お互いに足を止め、睨み合い、火花が散った。他人からこの様子を見れば俺が一人でサイコネシスでも使おうかと念を込めているように見えるかもしれない。そんな傍から見た自分を想像して痛々しくなり、足を進め始めた。

「勝ちました」

後ろでぼそつと呟いた美月に憤慨を覚えたが、自分は大人だと言いつつ聞かせて進む。

保健の先生は留守にされていて、保健室には誰もおらず、患者ノートにクラスと名前を書いてベッドに横になることにした。実際具合も悪くないし風邪を引いているわけでもない。ただちょっと寝不足気味なだけだけど、クラス中に俺がおかしかったことを見られているのでこのまま休んでもよからう。サボりとでも何でも言ってくれ。エアコンも程良く効いている保健室独特の静けさと薬品の匂いで気持ちどこか落ち着き、ベッドに横になると急に眠気が襲ってきた。肌触りの悪いシーツも今は気にならない。

「あの……………」

休ませてはくれないのだろうか。

「何だよ、見てわかると思うけど、俺は休もうとしてるんだ」

美月はそれに対して少し口を尖らせたが、姿勢を正して真面目な口調で話し出した。

「お尋ねしたいことがあるのですが」

「早く済ませてくれよ？」

美月は頷いて、不思議そうに聞いてきた。

「何故……………私の名前は美月なのですか？」

それは……………どうしてだろうな。よりによってこいつなんか「美

月』なんて名前。

「俺が聞きたい」

「……意味がわかりません。もう一度お尋ねします。どうして私の名前は——」

「どうだつていいだろ。特別な意味なんてないよ」

美月の言葉を自分の言葉で遮ると、美月は「そうですか……」と寂しそうに呟いた。

そんな顔されるとこっちが悪いことした気になるじゃないか。理由なんて、本当に何もないんだ。

「そんなに気になるのか？」

「いえ……ただ、人間は名前に意味を持たせるものとありました。

『美月』という名前にも意味があるのかと思っていたのですが、私に『美月』と名付けた理由は特になかったのですね。……すみません、少し期待していたようです」

自嘲気味に、寂しそうに笑う美月を見て、思わず胸が締め付けられた。こう、乙女的に言えば、きゅんって感じに。守ってやりたいような、そんなか弱い女の子の表情だった。

「あ……いや……」

そして、不覚にも可愛いつて思ってしまった。俺は美月の顔を見ることができず、視線はあてもなく彷徨う。悟られまいと平静を装うが、美月は首を傾げて不思議そうに顔を覗き込んでくる。

「どうしたの？」

の、の？ ご、語尾が変わってますけど美月さん？

また人差し指を唇に当てる仕草でさらに距離を詰めてくる。どうにかすると鼻先が触れてしまう距離まで俺と美月の顔が近付いた。

こいつ、まつ毛長いな。死神のくせに、女の子のいい匂いがする。

「ねえ、顔真つ赤だよ？」

な、ななな何だこれは！ そんなに可愛く言わないでくれ！

このままだと俺は……俺は……！

その華奢な体を抱きしめようかと肩に力が入って、

「お兄ちゃん」

と呼ばれて一気に力が抜けた。

お兄ちゃんって、こいつまた……。

「美月、俺には確かに可愛い妹がいてそれなりに大事にしているつもりだ。がしかし、俺の中に妹萌えという概念は存在しない」

「……本当に面倒くさい人ですね」

「何でこんな唐突にそんな要素を絡めてくるんだよ！」

「お礼ですよ。名前の。萌えたでしょう？」

美月は揶揄するようにくすくすと笑う。たしかに最後の？お兄ちゃん？さえないければ……いやいや自制できたはずさ。

「もういいだろ。昨日あんまり眠れてないんだから休ませてくれよ」

「暇ですよ、私」

「知るか」

美月に背を向けて毛布にくるまりそのまま目を閉じた。

「名前、ありがとうございます」

その言葉に少し反応してしまったが、毛布から片手だけを出してヒラヒラと手を振り返事をした。直接見ちゃいけないが美月は笑っていたような気がする。

目が覚めたのは何度目かわからない学校の鐘が鳴ったとき。随分時間が経っていたのか保健室に差し込む日射しの加減がだいぶ変わっていた。エアコンの効いている保健室の中でも汗ばむ暑さ。そんな中でよくも眠れていたものだと自分に感心しつつ備え付けの時計で時間を確認すると、さっきの鐘は昼休みが始まる鐘だった。

さすがに一日中寝てるのはまずいよな。

食料の調達に購買部へ向かうべくだるい体を起こした。早く行かないと大好物のカリカリピザトーストが売り切れてしまう。乱れた制服を直し、上履きを履いて保健室を出ようとしたとき、俺の手がドアに触れる前にそのドアが開かれた。

「あつ、渉、起きたんだ」

安堵の溜息をついて現れたのは隣のクラスの藤村明日美^{ふじむらあすみ}。その両手にはカリカリピザトーストが二つ、大事そうに抱えられていた。

「よ、よう明日美。どうしたんだ？」

「どうもこうもないよ。池田くんから渉の様子がおかしかったって聞いて飛んできたら当の本人は気持ちよさそうに寝てるじゃない。起きる様子がなかったからこれだけは買ってきてあげたの。困るんでしょ、これ食べられなかったら」

明日美は両手でぐいぐいっとカリカリピザトーストを押しつけてくる。

「あ、ああサンキュ。わざわざ悪いな」

「別に具合悪そうには見えないね。ま、良くなったんなら池田くんも心配してたし、教室に戻りなよ。あたしはお昼の約束してるからじゃあね」

と明日美は慌ただしく出て行った。言うだけ言って、相変わらずだな。

「お礼は駅前のパフェねー！」

また慌ただしく戻って来て、二カツと笑いお礼を強制される。「おいおい、あそこのパフェって高いだろ……」

「文句言わない！　じゃあね！」

今度こそ行ってしまったようだ。ま、これもいつものパターンか。前々から明日美には振り回されていたんだよな。

「献身的な方ですね。寝てる間に何度かみえられましたよ」

「……こいつみたいに」

「どっから湧いて出た。美月」

起きたときにはいなかったはずなのに、俺の後ろから話しかけてきた。振り返ると、思いつきり睨まれる。

「湧いて出たとは失礼な。私は虫ですか。この一週間で人に対する礼儀を勉強し直したらどうです？」

「お前は人じゃないだろ……」

今は付き合ってられん。まだ温かいうちにパンを食べないと。

ベッドで食べるのはいささか行儀がよくないので、先生愛用の椅子を借りる。

「先程みえられた、栗色のミディアムショートの髪で可愛い花のヘアピンをつけた、少し強気に見える大きい目をした可愛い女性はどなたですか？」

俺の代わりに紹介をありがとう美月。ついでに言えば成績優秀で運動は少し苦手。明るくて誰とでも気兼ねなく話せる笑顔が素敵な同級生だ。そんな明日美は、

「小学校からの腐れ縁だよ」

「恋人ですか？」

「そんなんじゃない。そんなこと、俺のデータでも見ればいいじゃないか」

カリカリピザトーストを一口。うん、やっぱりうまい。チーズとピザソースの量が絶妙だ。飲み物もあれば嬉しかったな。

「親や妹のように、明確な事実があることしかわかりません。その他交友関係はおおよその範囲を超えてわかることはありません。それと、データに記してあることは結果であり、その行動を起こした理由については、予測するしかありません」

「もぐ……よくわからないな」

「そうですね。たとえば、あなたがコンビニのデザートコーナーで散々悩んだ末にショートケーキを買ったとします。それについてはあなたがショートケーキを買ったという事実しかわかりません。あなたが理由を口に出していれば別ですが、他のデザートを買おうか迷っていたのか、そもそもデザート自体買うことを悩んでいたのか私にはわかりません」

ふむふむ、俺が納得していると、

「それを踏まえてお尋ねしたいことがあります」

またか。そんな疑問に思うほど波乱万丈な人生は送ってないつもりだけどな。データにはきつと俺のことが事細かに書かれてあるん

だろ。仮に殺人犯して隠れてたとしてもそれもバレバレなんだろうよ。

「食べながらでいいなら」

「行儀がよくありませんが、まあいいでしょう」

貴重な昼休みだ。そう言うな。

「あなたがこの学校を志望した理由です」

「ぶふっ！」と思わず噎せた。

「そんなに驚くような質問ですか？」

「ごほっ……、ぐっ……い、いや、なんで？」

「あなたの行動にいくつか不可解な点がありまして。ただの興味です」

美月はまたどこからデータらしいレポート用紙の束を取り出した。俺の様子を一瞥して、データに目を落とす。

「あなたもご存じの通り、この学校は県内でも有数の進学校です。実に卒業生の九十五パーセントが進学しています。それなりに勉強に励んでいないと入学は難しい。そして、この高校に学生寮はなく一部の補助金が出るとはいえ、遠方からだと家庭の負担が大きいものになります。よって、生徒の九割は近辺に住む生徒が占めています」

「へ、へえ。よく調べたな」

「あなたの中学の成績はお世辞にも良いと言えるものではありません。しかし、ある時を境に熱心に勉強するようになりました。それと同時に父親にこの高校に行かせてくれるように懇願しています。お金がかかりますからね。あなたの実家からこの高校までは、不可能ではありませんが通うには難しい距離。アパートなどを借りる方が好ましい」

「だ、だから？」

美月は俺を一瞥してまたデータに目を戻した。

「当時の担任、友人にも嘲笑われるような発言を受けていますが、あなたは自分の意思を貫き通し、見事に受験を突破してこの高校に

通っています。しかし、まるでそれがゴール地点だったかのようにこの高校では勉強に励む姿を確認できていません。あなたこの高校への志望動機を友人はおるか家族にさえ『なんとなく』としか伝えていない。私は何があなたを突き動かしたか興味があるのです」

「だ、だからなんとなくだよ。受験を乗り切るのが目標だったっていうか、そこで燃え尽きたんだなあ、た、多分」

美月は俺の態度が気に入らないのか、じいーっと疑いの眼差しで俺を見る。

「そうでしょうか？」

データをしまい、俺の目をまっすぐにみつめてきた。

「あくまでも推測の範囲では、これまでのあなたの行動を見る限り勉強が好きではありません。むしろ嫌っているようにも思えます。そして自分で話していた通り、妹を、それに家族を大事にしているようです。そんなあなたが家族に負担をかけてまで、嫌いな勉強をしてまで『なんとなく』といった理由でこの高校を目指すのでしょうか？」

あなたはあれですか、どこかの名探偵ですか？ いい推理力してんな。でもな、いくら美月が相手だろうと、本当の理由を話すのはさすがに……恥ずかしい。

「私の見解では先程の明日美という女性が深く関わっているものとドッキンだよ、ほんとにもうドッキドキだよそれ！」

「どうしてかなあ？ っていうか明日美の名前知ってたんだあ」

「あなたの友人ですからね」

「知ってるならそう言えよー。意地悪だなあ、美月はー」

「明らかな動揺。間違いなさそうですね」

美月は満足そうに何度か頷く。自分の推理が当たってご満悦なのか。こっちは逃げ出したってのに。

「あー、喉乾いた。飲み物買いにいくわー」

と美月に背を向けて出て行こうとすると、思いつきリシャツの襟を引っ張られた。当然、喉がひっかかるわけで。

「ごはっ！ こ、殺す気かよ！」

「殺す気ですが？」

こいつが言うのと冗談じゃなくなるんだよなあ。美月は「これを」と言って牛乳を差し出してきた。いつもいつも物をどこにしまっただやがるんだ。

「こういうこともあるのかと先程くすねてきました」

どういう状況を想定してたんだこいつは。牛乳少しぬるいし。

「あなたの行動が変化したのは明日美さんとのある会話の前後からです」

ふっ、ピンポイントだぜこのやろう。

「あなたは明日美さんとの会話のあと、すぐに担任へ進路相談を持ちかけています。その時期のあなたの成績を考えるとバカげた話です。その時の明日美さんとの会話の内容。簡単に言えば、明日美さんがこの高校に推薦入学したという話でした。間違いありませんね？」

「さ、さあ、どうだったかなあ？」

「間違い……ありませんよね？」

「……はい」

こ、怖え。いつでもあんたなんか殺せるんだよって目だったよこいつ。いや、死ぬより恐ろしい目に遭わせてやろうかとも言うっているようだった。

「そこにあなただけを突き動かす何かがあった。あの時期からの合格など奇跡と言うより他にありません。その奇跡を起こすほどの力は何だったのですか？」

「………きたかった………んだよ」

「すみません、もう一度」

「あ、明日美と同じ高校に行きたかったんだよ！」

ああ、とうとう言っちゃった。誰にも話したことのない俺のちっちゃな志望動機。美月だってほら、死神だっていうのにこんなに驚いた顔をして。笑えばいいさ、くだらないって笑ってしまえばいい

んだよおお！

「それは何故ですか？」

こ、こいつ、そんなことまで俺の口から言わせるつもりか。こうなったら言ってやる。ここまで来たら言ってやるさ！

「あ、明日美が……好き……だから」

小声で言う俺はやっぱりちっちゃかった。だって恥ずかしいよね。人を好きだとか、好きだとか、好きだとか。顔、赤いんだろうな。

「そうですか」

なんとまああっさりと言で片付けやがった。ここまで散々理屈めいたことぬかしてきたくせに一言かよこらあ！　と言いたくても言えないほど、俺は縮こまっていた。

「私にはわかりません」

美月はまた人差し指を唇に当てて言った。

「好き、とはなんなのですか？」

その表情はとても真剣で、冗談を言っているようには見えない。俺の熱も一気に冷め、頭をかきむしりながら答えた。

「難しいな。好きっていうのはその人のことを格好いいとか可愛いとか思ったり。それだけじゃなくて、その人と一緒にいたいとか、守ってやりたいとか、大事にしたいとか、そんな気持ち、かな、多分。俺にもよくわからないけど、そんな気持ちなんだと思う。お、俺は明日美と一緒にいたかったから、頑張ったんだ」

「なら……私には永遠にわからない気持ちなのかもしれませんね」
そう言った美月の表情はとても寂しそうで、何度か見たその顔はとても脆く見えた。

「そ、そんなことないだろ。そのうちわかるさ」
何を慰めみたいなこと言ってるんだ俺は。

「我々はあなた方にとって常に奪う側ですから。常に一人ですし」
美月が死神ということを再認識する一言だった。こいつも可哀想な奴かもしれないな。俺の仕事が終わっても命を奪い続けていかなければならないのか。人が悲しむ顔しか見ないのだろう。美月は感

情がある分、辛い仕事なのかもしれないな。

辛い？ ははっ、そんなことあるわけないか。もともとそんな仕事するために生み出されたんだから辛いなんて思わないよな。死神にとつては当たり前のことなんだから。ただ、美月は笑ったり怒ったりはするけど、悲しい気持ちも好きな気持ちも、ずっとわからないのかもしれない。

俺も、美月とどうしてこんな話をしているのかわからないな。

こいつのせいで死ぬのに。水先案内人がそばにいて、そいつのおかげで、気付かないうちに気が紛れてる。とても変な感覚、変な気分だ。

それ以降、美月は黙り込んで何かを考えているようだった。きっと自分が理解できない感情についてだと思う。

それから教室に戻ったが美月は沈黙を保ったままだった。池田が心配そうに体調のことを聞いてきたが、「ただの夏バテ」と言う。「ただのサボりか」と返される。それが嫌味に聞こえないのが俺と池田の関係かな。

「わたるー！ パフェー！」

放課後、HRが終わると同時に明日美がどんな辛気臭さも吹き飛ばすかのような笑顔を振りまいて教室にやってきた。昼休みに美月とあんな話をしていたせい、明日美の顔を見るなり顔が熱くなる。

「相変わらずお熱いこと」

池田が毎度のようにからかい口調で言う。

「そ、そんなじゃないって」

俺がそう言うのと池田は面白くなさそうに鼻を鳴らした。池田にも、明日美にも、とにかく俺が明日美を好きってことを悟られるわけにはいかない。

「わ・た・るー！」

俺のそんな気も知らずに、明日美は女子にあるまじき行為、ボディアタックを俺の背中に仕掛けてきた。明日美の形のいい胸が俺の背中に当たる。いや、あくまでも推測の範囲ですが。俺の心臓は破裂寸前。美月よ、今ならば死を受け入れられる。

「な、何すんだ！」

「照れちゃってー。かぁいいなぁ、渉はー」

後ろから抱きつかれて柔らかい髪がさわさわと俺の首筋に振れる。その行為が俺にどれだけダメージを与えるか自覚……できないだろうけどわかってもらいたい。

「パフエの約束忘れてないよねー？」

「や、約束した覚えはないけどな」

「じゃあ、行こっ」

おいおい、まったく聞いてないな人の話を。

いや、まあ、明日美と放課後デートなんて嬉しい限りんだけど、今日は妙に照れてしまつて二人つきりでいつも通りに振る舞えるか怪しいぞ。

「い、池田。一緒にどうだ？」

「遠慮しとく。自分の小遣い心配しなつせ。それに邪魔しちや悪いつしょ」

そんないらぬ二重の気遣いは無用です。池田ともあるうものが俺の心情を汲み取ってはくれんのか。いや、わかってもらつても困るか。

「わーたーるー！」

すでに教室の入り口まで向かつていた明日美が叫ぶ。クラスメイトも毎度のことだと思つているのか気に留める様子もまるでない。

覚悟を決めねばなるまいな。何の覚悟から知らないが俺は気合いを入れて荷物を手にした。明日美は俺を溶かしてしまいそうなほど眩しい笑顔で俺が隣に来るのを待ち、そして二人で歩き出した。どこからどう見てもカップルが仲良く歩いている見えるんだろうけど、残念ながらそういう関係じゃないし。

ちなみに美月は後からとことこついて来ている。不思議そうな顔だった。照れている俺が不思議なんだろうか。

「明日美、また明日っすねー」

廊下ですれ違ふ明日美の友達が挨拶する。よく明日美と一緒にいるのを見かける女子だ。

「相変わらずラブラブっすねえ」

ここに女版池田がいた。明日美も苦労してんだな。

「もう、そんなじゃないってば。渉はただの友達なんだからあ」

ああ……罪の意識のない笑顔がこんなに痛いなんて。泣いていいか？ そうなんだ、俺のことなんて明日美にはこれっぽっちも男として意識されていないんだ。じゃないとボディーアタックなんて嬉しいコミュニケーションを敢行してくるはずがない。

「渉、早く行こう。あたしが好きなパフェ数量限定なんだからね」

俺は大きな溜息をつきながらも、やっぱり嬉しい明日美との放課後デートに胸を躍らせていた。なんだかんだで、明日美と二人つきりっているのはいいもんだから。

「萌え、ですか？」

耳元で、美月がそう囁いた。二人つきりなんかじゃなかった。

「明日美、ちよつとトイレ」

「えーっ。早くしてよ？」

心の中で明日美に土下座してトイレに駆け込んだ。都合良く誰もいない。そしてこれまた後ろをついて来た美月と顔を合わせる。俺は真剣だ。マジだ。

「美月」と呼ぶと「はい」と返事がきた。

「悪いけどこれからのひととき、俺がこの学校へやってきた理由の明日美と過ごす貴重な時間が訪れるんだ。話しかけても答えないし、間違つて答えて独り言を言う変な奴とも思われたくない。だからせめて明日美と一緒にいるときは話しかけないでくれ」

美月は一瞬納得のいかない顔を見せたが、閃いたようにポンツと手を叩いて俺の肩に手を置いた。

（これなら大丈夫でしょう？）

（のわっ！？）

頭の中に美月の鼻にかかる声が響いてきた。そして美月は手を離してにこやかに言った。

「私があなたに触れている間は頭の中で会話できます。問題ありませんよね？」

人間らしくしたらどうかと提案した手前、こんな人間離れた特殊能力は遠慮してもらいたいもんだが、あとでいろいろうるさいよりもマシだろうと了解の意を示した。

そして明日美のところへ戻り「悪い、待たせた」と謝ったけども、明日美はぶうつと頬を膨らませてご機嫌斜めのご様子だった。でも「ケーキも注文していいから」と言うと、俺の手を引いて勢い良く走り出した。小さな手が、俺の手を力強く握る。

まさに青春を駆け抜ける男女の構図、なんて浮かれていたんだけど、俺と明日美が人をよけながら走るのに対し、美月が文字通り人をすり抜けながら走る姿を見て気持ち悪くなった。げんなりしつつも、俺がしっかりと明日美の手を握っていた。

駅前のケーキ屋『ルブラン』まで一度も立ち止まることなく走り抜いた俺たちは、息を切らしながらメニューを広げていた。こんな真夏に走り続けること十分。女の甘いものへの執念はすごいもんだ。明日美は運動が苦手という俺の中の明日美データも更新しておこう。店内は大きな窓際にカウンターがあり、あとはテーブル席が十席ほどある。赤と白を基調としたカフェスタイルだ。駅前ということもあって今の時間は学生や主婦の方々と賑わっていた。

明日美は目的のオリジナルブランパフェ。それと美月が話しかけてきたせいで追加されたショートケーキとアイスティー。俺はアイスコーヒーを注文した。

店内のよく効いたエアコンで汗が引いてきたかなと思う頃、注文

した品がテーブルに並べられた。明日美はなんやかんや詰まったパフェを届くなり嬉しそうに口にする。

ちなみに俺と明日美は向かい合って座り、美月は俺の隣。気にするまいと思うがどうにも不自然。俺にしてみれば三人で、周りから見れば二人なんだから。妙な違和感がある。

「何か無理矢理に奢らせたみたいになっちゃったね」

明日美がパフェとケーキを同時に食べながら言った。フォークとスプーンの二刀流。器用な奴め。

「気にすんな。パンのお礼だし、無理矢理ってわかってて言ってるだろ？」

「てへっ。そう、確信犯！」

ふっ、可愛いぜ明日美。口元についたクリームを拭ってやりたい。が勇気がない。

（すみません）

突然美月が話しかけてきた。一度美月の方を向いてしまいがすぐに明日美に視線を戻す。

（何だ？）

（その、パフェとやらを食べてみたいのですが……。とてもおいしいそうです）

と俺の目の前に出て来てパフェを指差す。もちろんテーブルがあるわけであって、美月の体がテーブルからよきつと生えているように見える。どうしてか長い黒髪だけがテーブルに広がっていて怖い。

（とりあえず戻れ。不気味すぎる）

そして俺の隣にちょこんと座る。

（あの……パフェを……）

か細い声で話していたが、明日美の方を向いていた俺はその表情を確認することはできなかった。物欲しそうな顔か、不満気な顔か。少しだけ興味が沸いた。

（美月、まずこの状況を理解してくれ。パフェは明日美の目の前に

あるんだ。そしてお前がスプーンを持つとスプーンが空中浮遊するという超常現象を明日美は目の当たりにすることになるんだ」

「涉？」

明日美が不思議そうに俺の顔を覗き込んでくる。首を傾けて少しだけ上目使い。わざとのようにも思える可愛らしい仕草だぜ。

「何か上の空だね。考え事？」

美月との会話に気を取られてぼーっとしていたみたいだ。「何でもない」と軽く流す。明日美を見ながら美月との会話。難しい作業だ。

「やっぱり具合悪いんじゃない……（明日美さんを席から立たせれば……）」

おいおいやめてくれ。俺の頭は脳内ステレオを処理できるほどハイスペックじゃないんだ。

「大丈夫？（その隙に一口でも）」

「だ、大丈夫大丈夫」

「ならいいけど（了解したということですね）」

「おい、どうしてそうなるんだ」

「えっ？ よくなかった？」

あつ、明日美？ やらかした！

「いや、違うんだ。大丈夫大丈夫。ははっ……」

（早く席を立たせて下さい！）

（美月！ 少し黙ってる！）

「やっぱり少し変だよ。早く帰った方がいいね」

明日美は困惑している俺の前でさっさとパフェとケーキを平らげてしまい、帰る支度を始めた。

「ほら早く。病人は帰って寝る！」

こうなった明日美は止められない。強引に席を立たされ、支払いも明日美が済ませてしまい、「まっすぐ帰るように」と念まで押されて『ルブラン』の前で別れた。

俺はだんだん遠ざかる明日美の背中を名残惜しく見つめ、見えな

くなつたところで我が家への道をとぼとぼと歩き出した。美月は帰り道もパフエがどうだのこうだのガキンチョのようにやかましかったが完全シカトを決め込みアパートまで帰って来た。

「パフエー！ パフエが食べたいですう！」

道を歩いているときも、帰ってきてからもこんな調子だった。終まいにや俺の首根っこを掴んでぶんぶん頭を揺さぶる始末。ほんとにタチの悪いガキンチョだ。クソガキだ。

「だああ！ 大概にしろ！ 勝手に食つてくりやいいだろうが！」
美月を強引に振り払う。ああ、目が回ってる。

「私はあなたのそばを離れるわけにはいけないのです！ パフエを
用意してください！」

「無茶苦茶言うな。学校じゃ俺が寝てる間に牛乳とかくすねてきた
だろ」

「それはあなたが眠っていたからです」

「じゃあ俺が寝てから行けよ」

「……そうですね。そうします」

納得……したな。店は閉まつてるだろうし、どうやって食べるつもりか知らないけど。忍び込んで食うつもりか？ 犯罪だ。

晩飯をあり合わせて済ませると、今度は「寝て下さい。一秒でも早く寝て下さい」と違う駄々をこね始めた。

嘆息しつつ、「お前がうるさいと眠れない」と黙らせシャワーを浴びる。浴室まで入ってきたので一人暮らしたというのに前を隠しながらシャワーを浴びるハメになった。

ベッドに潜り込むと俺が眠るのをじーっと待つ美月。どうやら寝たふりは通用しないらしい。

まったくんだ死神に憑かれてしまったな。

ある程度騒がしい方が気が紛れるけれども。こいつがいるから考
えることであつて、こいつがうるさいから考えなくてもいい場合も

ある。

俺は、死ぬってこと。

こんな実験に何の意味があるのか理解不能。
ある程度は仕方がないことではないのか。

これは危険な実験だ。

被害が及ばないとは言いつれない。

しかし、私は命令を全うするだけ。

それまでは、ただ待つだけ。

こんな疑問を持つことすらおかしいことなのだ。

何も考える必要なんてない。

どうせ無駄なことなのだから。

一日が過ぎた。

『美月』と命名された。

一時、監視対象から距離を置いてしまったことを報告。

二日目

「起きて下さい」

人の適応能力には全くもって驚かされる。俺は美月の声を聞いて驚くことはなかった。しかしこれは――状況がよく飲み込めない。

「何を……してる？」

美月は寝ている俺に馬乗りの状態で乗っかっていた。不思議と重さは感じない。

「わかりますか？」

そしてロードを突き出してきた。盤面の数字は『2』に変化している。

「なんだそりゃ。時計ならある」

ただの強がりだっことはわかってる。

「こんなものはどうでもいいのです！」

「いいのかよ！」

思わず突っ込んでしまったけど、えっと、何か怒ってる？

「な、何だ、どうした？」

美月はロードをしまい、ぐいつと顔を近づけてきた。

「いいっ！？」

美月もそれなりに可愛いんだ。健全な男子高校生としてはこういうシチュエーションは困る。しかし、美月を跳ねのけようにも俺の体は首から下がぴくりとも動かない。

「お店、開いていませんでした」

「は？ お店？」

しばし頭を悩ませ昨日の記憶を探ろうとしたがその必要はなく、俺の疑問の答えはすぐに美月の口から飛び出した。

「あなたが眠ったあと、すぐにあの店に行きましたが、『閉店』という札が掲げられてあり、中には誰もいませんでした」

ほんとに行っただ。様子からするに勝手に食ってきたって感じ

じやなさそうだけど。

「そりゃあそうだろうな」

「……やはり知っていたのですね」

美月はゆらありと起き上がって不気味な笑みを浮かべた。何か、恐ろしい笑い方だぞ。

「ふふ……これがバカにされるといことなのですね。す、すごく腹立たしい気持ちです」

あ、あの……美月さん？

「あまり手荒な真似はしなくなかったのですが。パフェのためです、仕方ありませんよね」

仕方なくないだろ正当化するな、って、な、何をするつもりだ。とりあえず逃げ……か、体、動かない……。

「ふふふ、無駄です」

「ま、待て！ たかがパフェのために人間相手に何をするつもりだ！」

「たかがパフェ？ 私がどれだけ楽しみにあなたが眠るのを待っていたかと思っっているのですか。それに、あなたは私に人間らしくしろと言ったじゃないですか。物事を自分の都合に合わせようとするのは人間の悪い癖です。私は、パフェが食べたい。どうです、実に人間らしいでしょう？」

こ、こんな超能力まがいの特異能力、全然人間らしくない！

「覚悟はいいですね？」

「やめてくれ！ 手を出すな！」

や、やめて、そんな、そんなところに手を……手を脇腹に？

「こちよこちよこちよ」

「うっ、うわーっはっはっはっ！ ちよ、やめっ！ ひやはははははははははは！」

「どうーです！ 地獄の苦しみでしょう！ 地獄では有名な拷問です」

こ、こんな、俺の弱点を知り尽くしているかのようなピンポイン

「さあ、わかったのならパフェを食べに行きますよ」

「はあ？ 冗談だろ。今日も学校なんだから。放課後だ、それでいいだろ？」

「あなたは私のパフェよりも学校が大事だと？ 優先順位を正しく願います」

「順位をつけたら下から数えた方が早いわ！ ったく、放課後まで我慢しろ。楽しみは後に取っておくといった素晴らしい言葉もある」

美月はむうつと頬を膨らませていたが納得したのか俺を解放した。ついでに介抱して欲しい。主に精神面で。朝っぱらから何て体力を使っちまったんだ。ああ、汗でかくで気持ち悪い。

「ありがとうございます。拷問した甲斐がありました」

満面の笑みを浮かべ「えへへ」とパフェのことでも思い浮かべているようだった。そういうところはこいつも女の子で、人間らしいんだろうなあ。

「ああ、そういえば」

何かに気がついたように、美月は俺の方を向いて手を叩いた。

「何だよ」

「遅刻しますよ？」

「そういうことはもっと早く言ってくれ！」

朝から散々笑わされたあげく学校まで全力疾走とは先が思いやられる一日だった。汗でかくで走り、コンビニに寄る時間すらなく、教室に着くなり机に突っ伏した。

「汗くらい拭いたらどうなんよ」

少し派手目なスポーツタオルを差し出してくる池田。ありがたく使わせてもらう。汗を拭いて返そうとすると当然のように「洗って返しんしゃい」と一蹴された。

「昨日といい今日といい、涉が遅く来るなんて珍しいねえ」

池田に美月のことを話しても保健室にどうぞってことになるしな。

「いろいろあつて」と曖昧に返した。美月がやってきてたつた一日で俺がどれほど振り回されているのか、俺の苦勞をわかつてもらいたいぜ。

「ついに藤村と一線越えたんか。その……気持ちよかったのかにや？」

どうも俺の周りには自分の解釈で物を言う奴が多いみたいだな。

「昨日はすぐに帰ったよ。これでもかというほどあっさり」

「ふむ、ならば喧嘩とな。相談相手なら買って出ようじゃん」

「違う違う。明日美とは何もないから」

「なっ！　じゃあ誰とっ！？」

「まずは誰とどうなったかっというところから切り離してくれ」

「……なんぞ、つまらん話しか」

勝手に喰らいついてがっかりすんなよ。

一時限目は体育。最悪だ。しかも百メートル走の繰り返し。もう十分走ってきたよ。体育教師が俺に恨みを抱いているとしか思えない被害妄想。美月は美月で俺の横を涼しそうな顔で走ってたし。いや、滑ってたし。その能力を分けて欲しい。

休み時間には明日美が俺の様子を気にして教室にやってきた。ただ疲れ果てて机に突っ伏してただけの俺を見て、「まだ渉具合悪いんじゃない！」やれ早退だの保健室だのの大騒ぎ。それは大いに結構なんだけど、明日美は次の授業の教師が入って来たことにも気がつかず、それに俺も絡んでいるもんだから始末が悪い。明日美は早々に退散。みんなは白々と静観。俺は深々と深謝。もうどうにでもしれくれ。疲れてるんだ。

十全な休息。

昼休み、立ち入り禁止の屋上に俺はいた。屋上へのドアには鍵がかかっているんだけど、その横の小窓から出れるもんだから鍵の意味がない。胸の高さにあるから出にくいけどな。

小窓を抜けるとフェンスに囲まれた二十五メートルプールほどの広さの屋上。入口の上には貯水タンクがあり、静かな屋上はその陰に入りさえすれば風通しもよくて涼しい。普段は人目があるからなかなか来ないけど、ゆっくりするならやっぱりここなんだよな。

カリカリピザトーストを二つ平らげ、出入り口の横の壁に背中を預けていた。

落ち着く。

「パフェの時間が近付いてますね」

美月が隣にしようと思わない、落ち着く。

「あつ、やっぱりここにいたんだ」

不意に明日美が現れようと思わない、落ち着く…… かないよな、これ。

小窓からきゅーちくるな顔を覗かせていた明日美は軽やかに身を翻して屋上に降り立った。その姿は純白の翼を持つ天使のよう、なんて思う俺はもはや病気じゃなからうか。可愛いよ明日美。

「何してたの？」

スカートを押さえながら俺の隣に座り込む。美月とは反対側右隣。柑橘系のコロンの匂いが鼻に届いて心がハッピー。最近の明日美のお気に入りだ。もちろん俺もお気に入りだ。

頬が緩みっぱなしの俺とは対照的に、美月は身を乗り出して明日美を覗みつけていた。どうしたってんだ。

「ちよつと休憩」

「ふーん、じゃ、あたしも休憩しよつかな」

と明日美は俺と同じように壁に背を預け、気持ち良さそうな溜息をついて目を閉じた。俺も真似して目を閉じてみた。誰もいない屋上ではセミの泣き声と風の音だけが聞こえてくる。

なんか…… いいなあこういうの。

「パーフェー」 パフェパーフェー」

雰囲気ぶち壊したこのやろう」

俺は首だけを傾けて美月の方を見る。なんとも気持ち良さそうに

歌ってやがる。俺はどんな顔をしているのか。怒りか、可哀想な奴を見る目か。

（美月。おい、美月）

左手で、そつと美月に触れた。

「何ですか？ 邪魔しないでください」

（それはこつちの台詞だ。何もかも台無しだよ。うるさい。空気を読め。静かにしてろ）

「私の声はあなたにしか聞こえていませんし。それにほら、空はこんなに青いのにな」

美月は屋上の中央まで駆けて行き、くるくるくるゝと踊る。何をしたいのかさっぱりだけど、とにかく開いた口が塞がらない。ぽかーん。

「ん、渉？」

明日美は違和感を感じたのか俺を確かめるように俺を呼んだ。俺は作り笑いだけで返事をした。

「ふわぁ……やばいここ。眠くなっちゃう」

欠伸＋背伸びという滅多にお目にかかれない明日美の仕草に自然と顔がほころぶ。ついでに背伸びで張られた胸がなんとも。夏服だし、その、透けてね。いや、夏だしね！

「寝ててもいいぞ」

「やーよ、渉に襲われちゃうもん」

「し、しねえよそんなこと！」

「冗談に決まってるでしょ。すぐ顔赤くして。やっぱり可愛いなあ、渉は」

それは、相手がお前だからなんだよ。

小学生で初めて明日美と会った時、喧嘩した。原因が何だったのか覚えてはいないけれど。それからことあるごとに明日美は俺に突っかって来て、それで何故かいつの間にか自然に話すようになって、いつも一緒に遊ぶようになって、気がつけばいつも明日美と一緒にだった。何がきっかけで好きになったのかはわからない。ずっと

好きだったのかもしれない。もしかしたら好きと呼べる気持ちじゃないのかもしれない。だけど、ただとたしかに、俺は明日美が好きなんだ。

「あたし、先に教室に戻るね。次の授業って移動教室だから」

……このままでいいのか？ 死ぬとわかってて、このまま、何も変わらないまま全てが終わってしまったとして、俺はそれでいいのか？

「あ、明日美！」

立ち上がり、背を向けていた明日美に向かって叫んだ。何を考えていたわけじゃないけれど。

「あ……こ、今度ちゃんと奢るよ。ぱ、パフェ」

「……うん。期待しないで待ってるよ。いつものように、ね」

明日美は意地悪く笑って戻って行った。

今度って……急がないとな。

明日美がいなくなった屋上は、ひどく寂しかった。

やらなきゃいけないことが見つかった。どうせ死ぬなら、なんでもできるさ。

「美月」

「何ですか？ 今日は私とパフェを食べに行くんですからね」

俺が明日美を誘うと思ったのか、じろりと俺を睨む。

「ちゃんと連れて行くよ。その……俺の命はあとどれくらいなんだ？」

美月は少し驚いた表情を見せたが、すぐに真剣な面持ちでロードを取り出した。

「正確には、あと五日と十一時間四十二分……三十秒です」

「そっか、改めて聞くと短いもんだな」

今までの俺からすると攻略最難関の高難易度ミッションだ。ただ、俺は決めた。

「訂正する。変わるつもりはないと言ったこと。死ぬ前にやりたいことができた」

「好きにすればいいじゃないですか。わざわざそんなこと……」

「ははっ。そりゃそうだな」

美月はむうつと唸って人差し指を唇に当てた。どうやら困らせてしまったようだ。俺だって、わざわざ言う必要なんてないことだっ
て思うよ。だけど聞いてもらいたかったのかもしれない。俺が死ぬ
ことを知っている唯一の存在の美月に。

「それで、やりたいことは？」

「明日美に、気持ちを伝えるんだ」

たったこれだけのことで、妙に清々しい気分だった。ただ伝
えられればいい。死ぬ間際に後悔なんてしたくない。伝えなきゃっ
て、思うんだ。

「それが、あなたのやりたいこと。もっとも大事なことなのですか
？」

「ああ、そうだよ」

俺は、笑っていたんだと思う。美月と出会わなければ、もしかし
たら一生こんなことは思わなかったのかもしれない。自分の死を見
て思ったことだから。だから訂正。いつも通りじゃないのだから。
そんな新しい自分に酔っていたのか、よほど浮かれていたのか、
気が大きくなっていたのか。

五時限目をさぼってしまった。

少しだけ日が傾いたおかげで伸びた貯水タンクの影に合わせて、
よっこらせと横になる。ベルトが当たって腰骨が痛い。制服が汚れ
るのも構わず、仰向けになり空を見上げた。

「あなたは死を受け入れたのですか？」

隣にちよこんと座り空を見上げていた美月がそんなことを口にし
た。美月を見るとちよと目が合った。しかめっ面で、少し睨むよ
うな目をしていた。

「受け入れた、とは違う。死にたくないさ。どうにかなるんならど
うにかしてくれ」

「……なりません」

「ははっ。それなら、しゃーないだろ」

「……何故、私にはわかりません。もっと、死は人間にとって恐ろしいものであるはずなのです。どうして笑っていられるのですか？」
納得のいかないような声だった。眉は丸みを増して三日月が二つ。俺が笑っているのが気に入らないのか。いや、そうじゃない。美月には単純にわからないだけなんだろう。俺だってわからないさ。

「言わないで後悔するより、言ってスッキリした方がいいよなって思っただけだ」

「答えになっていません」

美月はきつと全てを理解しないと気が済まないタチなんだろうな。
「そのうちわかるんじゃないか？」

我ながら無責任な言葉だった。誰かを好きになることなんてない美月には、今の俺の気持ちなんて永遠にわからないのだろう。美月が誰かに思いを伝えることなんて、訪れることはないのだから。

放課後、俺は美月に無理矢理約束させられた『ルブラン』に来ていた。

座った席は一番奥のもつとも人目につきにくい場所だ。

俺は甘いものがあまり好きじゃなく、いや、たまには食べたいと思うこともあるんだけど、そんな俺の前に『ルブラン』のオリジナルパフェが置かれている。よくよく考えてみればこんなオシャレなケーキ屋に男一人というのはなかなか恥ずかしい、どころじゃないお客の大半を占める女性客が俺のことを珍獣でも見る目をで見ている。いつそ檻で囲まれた方が諦めがつきそうだ。

美月は目の前のパフェにまだ手をつけておらず、パフェとずっとにらめっこをしていた。人目があるから食べにくいのかもしれない今だー、とでも合図が必要かな？ 何気に目立ってるもんな、俺が。
「あの、いいのでしょうか？」

「いまどき、スプーンが宙に浮くくらいの超常現象なんでもないさ」

いや、あるか。一人でケーキ屋で手品っていうのも痛々しい。

「そうではなくて……」

ん、違うのか。ならさっさと食べて欲しい。一刻も早くここからおさらばしたいのに。

「明日美さんに伝えなくてもいいのですか？」

……こいつは驚いた。美月の奴、俺のこと気遣ってたのか。偽物じゃあるまいな。

「何だ、そんなこと気にしてたのかよ」

「そんなことって、あなたのもっとも大事なことになるでしょう？」

「気持ちを伝えるのには少しばかり心構えが必要なんだよ。俺もそんなに度胸があるわけじゃないしな。だから遠慮せず食ってくれ。できれば急いで食ってくれ」

その言葉を聞いて、美月は途端に喜々をしてパフェに手をつけ始める。まずは一番上に乗っかっていた生クリームつきのバナナを小さな口をあーん、精一杯頬張って食べる。うん、実に微笑ましい。「パフェ、おいしいです」

お前が食べたのはパフェだろうけどただのバナナだ、そう言いたかったけど美月の嬉しそうな顔を見て言葉を飲み込んだ。無粋なこととするまい。なんだか頭を撫でたくなる。

俺はそのまま周囲に気を配りながら、美月が食べ終わるのを待つことにした。

でもな、やっぱりこんなところに一人で来たのが間違いだったのか。

「あれー、森田くん？」

聞いたことのある声が背中から俺を呼んだ。ギギギ、ブリキのおもちやのように振り返ると、そこに立っていたのはうちの制服を着ていた女子二人。一人は見たことがある。

「えーっと、たしか明日美とよく一緒にいる……」

「古川みどりっす。以後よろしくっすう！」

昨日、帰り際に明日美に話しかけてきた女子だった。ショートカ

ツトで活発そうな女子。ピースをしながら自己紹介を果たした。もう一人は春日さんというらしい。似たような髪型で、こちらはおとなしそうな子だった。

「明日美は一緒じゃないんすか？」

当然のように、古川さんは聞いてくる。君の昨日の一言が俺をちょっぴり傷つけたんだよ。

「今日はいつ……じゃなくて一人」あぶねーあぶねー。

「ふーん。じゃ、ご一緒しちゃうっす」

「えっ！？ なん——」

俺が何を言う間もなく、二人は俺の向かいの席に座った。せめて俺に確認するなりしてくれ。この状況が俺をどれだけ困らせるか君らはわかっちゃいない。

「また邪魔者が……」

美月は見えないことをいいことに思い切り身を乗り出して二人を睨みつけた。またって、昼間に明日美を睨んでいたのはそういうことか。

（美月、今は我慢してくれ）

（わかっています）

美月は歯を食いしばって歯ぎしりに貧乏ゆすりまでし始めた。ほっといたら二人の命を奪ってしまうんじゃないか？ 早く帰った方がいいぞ、二人とも。

そんな俺の心配をよそに二人は各々ケーキを注文した。俺はその慣れた様子に口を挟むこともできずただ呆然としていただけだった。このままではいつまで持つかわかったもんじゃない。

「気にしないで食べてくれて構わないっすよ」

俺がパフェにまったく手をつけないのを気にしてか古川さんが有難迷惑な発言と共にどうぞ、と手を返した。

「あ、ああ、二人のが来るまで待つよ」

言って後悔。これじゃ二人の品が届いたら食べねばならんじゃないか。

「へー、優しいっすね。同席するのも断らなかつたし」

どこに断る暇があつたのか教えてくれ。そしてやり直させてくれ。教えられた通りに断るから。そうしたらほら、美月の怒りの地団太で俺の足が傷つくことなんてないわけですよ。八つ当たりはやめろ美月。

そのまま二人の注文が届くまで、俺は何をするでもなく、二人が楽しそうに話す友達やら芸能人の会話に耳を傾けていた。別に話しに加わりたいわけじゃないんだけど、わざわざこの席に座ることなんてなかったんじゃないか？

そして注文が届き、「わぁおいしそう」と常套句を述べた二人はさっそくケーキに下鼓を打ち始めた。

さーてどうしよう。このままおとなしく二人が食べるのを待つ、

「森田くん、食べないんすか？」

わけにもいかないようだ。

「い、いやー、いただくよ」

「がるるる……！」

俺の隣、飢えた獣がそこにはいた。

美月はスプーンを取ろうとした俺の腕を掴んで離さない。痛いって痛い。

（美月、わかってくれ）

（なんとかどうにかして下さい！）

そう言われてもなあ。帰ってくれというわけにもいかないだろうし。

「どうしたんすか？」

「いやあ、僕、どうもお腹の調子が悪くなってきたみたいで……はは」

意地でも誤魔化す！ こちとらだってなあ、朝の拷問を受けて来た『ルブラン』なんだ。このまま引き下がるかってんだ。

「じゃあ、あつしがいただくっす」

古川さんは、有無も言わずパフェを取り一口パクリ。

「あーーーーーっ！！」

ああ、耳鳴りが……。うるせえよ美月。まあ大声叫が頭の中に響かなかっただけマシか。

「わ、私のパフェを……」

美月は両手をテーブルについて驚愕の表情で古川さんを睨む。俺は知らん顔するので精一杯。

「あ、おいしい。パフェって食べたことなかったけど、今度来たらこれ頼もう」

そして、連れの春日さんも便乗して一口食べた。

「わっ、私のパフェーーーーー！」

美月が見えてないんだから仕方ないんだろうけど……。

古川さんたちに悪気はないんだ。だから落ち着いてくれ美月。拳を握り締めているが一体どうするつもりなんだ。お前が危害を加えれば間違いなく俺がやったとみなされて下手すりゃ明日美ともサヨナラバイバイになってしまうだろうが。

（よーし美月。まずは深呼吸だ！。そして落ち着いたら着席！）

（はっ！？）睨むな睨むな。

「ところで森田くんってさー」

今は話しかけないでくれ。俺は君らを守っていると言っても過言じゃないんだ。

「明日美のなんなんすか？」

「……え？」

い、いきなり突拍子もないな。こっちは必死なのに。でも無視もできない問いかけだ。

「何と言われてもな……」

（パフェー！）

（美月ー！）

「本当にただの友達っすか？」

（パフェー！）

「あ、明日美がそう言ってただろ？」

（ぱーふえー！）

（あ、あとでもう一つ注文するから！）

「明日美はそう言うけどさあ（本当ですか！？）」

「ほ、ホントホント」

「ふーん（ありがとうございます）」

よく頑張った俺。で、全然納得してくれていない古川さんと無邪気な笑顔を浮かべる美月。子供と大人をいっぺんに相手しているようだ。

「明日美のこと、どう思ってるんすか？」

な、なんだこれは。ニタニタ笑うな！俺の心を見透かさないくれ！

「ど、どうって、付き合いの長いただの友達だよ」

くう……。自分の口からこんなことを言うハメになるとは。悔しいけれど間違いじゃないんだよね。でも少しだけ、特別だと思ってもいいかな。付き合い長いし。それだけけど。

春日さんは俺が尋問されている様を楽しそうに見ていた。女子ってこういう話し好きだよなあ。

「実は、あつしはそう思ってたないんすよねえ」

身を乗り出し、探偵気取りで組んだ両手に顎を乗せて古川さんは言う。口元にはうすら笑い。

「俺と明日美は互いにそう思ってるからさ」

「お互いに友達だと思っているから一步を踏み出せない、なんて事もあるんすよねえ」

俺の心情はまさにそれだったよ古川さん。

「あつしのカンって、良く当たるんすよね」
うん、そだね。

「へ、へえ。でも今回はハズレみたいだね」

古川さんはつまらなさそうに、けど少しだけやれやれといった溜息をついた。

「ま、いいんすけどね。お似合いだと思うよ、あつしは」

その言葉、ありがたく頂戴しておこう。だけど俺は決めたんだ。ただの友達だと思われていたっていい。たった一言、伝えられればいいんだ。

結局、美月のパフェは古川さんと春日さんによってきれいに食べられてしまった。美月は早く次が食べたいようで「早く食べろ」と念仏のようにぼやいていた。

女子二人が先に帰り、一緒に店を出ればよかったと若干後悔しつつ、美月のパフェを注文するべく店員のおねーさんと呼んだ。

「申し訳ありません。本日のオリジナルは全て出てしまいました……」

せっかく二人が帰って安心して油断したあとに告げられた驚愕の事実。そういえば明日美が数量限定と言っていたな。早く行かないと売り切れるっぽいことも。メニューにもきちんと書いてある。おねーさんが黙って注文を待っていたので「またあとで」ととりあえず引いてもらった。

「あの……これは一体どういうことなのでしょう？」

わ、わかってるんだよな、わかってるんだよな美月。き、気持ちわかるぞ。楽しみにしてたもんなあ。怒ってるのか？ 顔がよく見えないけれど、怒ってるのかなあ？

「食べられない、ということなのですね」

「う、うん。まあほら、パフェなら他にも色々あるしさ、今日のところは……あ、あれ？」

どうにも美月の様子がおかしい。これは、怒っているんじゃないかと……。

「うつ……うつ……た、たの、楽しみに……して、たのに……」
泣いて……る？

美月は子供のように拗ねた様子でそばを向いて大粒の涙をぽろぽろ溢していた。唇はぎゅっと結ばれて嗚咽を漏らしている。スカートを握り締める手も震えていた。

あー、こういう時はどうすればいいんだ？ 誰かマニュアル、マ

ニユアルをくれ。

「お、おい、泣くなつて。一応食べられたんだし、今度は違ってもんでもどうだ？」

「パフェ……、ひ、ひつく……あ、あのパフェがいいのです……」

そ、そんなにこだわるもんなのか？ パフェなんてどれも大差ないだろう。

「仕方ないだろ？ ないもんはないんだから」

「うう~~~~~」

な、泣くのか？ 大泣きでもしようつてのか？ 睨まないでくれ、俺にはどうにもできないんだ。

「うわあああああああああああああああああああああん！」
マジ泣きしやがった。子供が大口開けて泣くそれである。

あれこれ慰めてみたり、頭をよしよし撫でてみたり、変な顔をしたりしてみたが一向に泣き止む様子は見せなかった。美月が人間だったなら美月を連れてそそくさと店を出るところなんだけどな。

「美月、いい加減に泣き止んでくれよ。仕方ないんだからさあ」

「うわあああああああああああああああああああああん！」

はあ……もういい。元々俺の金なんだし、何でこいつのわがままを聞いてやらなきゃならないんだ。無理矢理奢らせられてるっていうのに。

「そんなに食べたきや明日誰かが注文するまで待つてろ！ 目を盗んで食べるんだな！」

俺はさっさと支払いを済ませて店を出た。

俺について来るしかない美月は外に出て号泣。歩きながらも号泣。走っても号泣。信号待ちでも号泣。何なんだよお前。

「うわあああああああああああああああああああああん！」

あー……鬱陶しい。

このままでは夜も眠れないかもしれない危機を感じた俺は、途中でコンビニに寄った。そこでプリンを一つ買い、大口開けて泣いていた美月の口に一口分ぼとつと落とした。

「うわあああああああああああつんん!？」

美月は濡れたままの瞳を大きく見開きつつも、放り込まれたプリンを小さな口をもごもご動かして味わう。小動物のようだ。

「どうだ？」

そう聞くと、美月はあーん、とまた口を開けた。ピシツという音とともに俺は固まる。けどどちらんちゃん背伸びをしながらまだかまだかと待っている様が可愛らしく、ついついもう一口放り込んだ。「お、おいしいです!」

両手を頬に当てて目をきらきら輝かせるゴスロリ少女。あとは自分で食べるようにとプリンを持たせ、コンビニの隅で死角を作つてやりそこで食べさせた。満足した美月はプリンの歌を歌いながら俺に足並みを合わせる。

良く言えば可愛いし、悪く言えば世話のかかるわがままお嬢様だ。でも、笑いながらプリンを頬張る美月を見ると、悪い気はしなかった。

アパートに帰りつき、さつさと夕食を済ませ、シャワーを浴びることにした。

今日は朝から笑われ、走らされ、古川さんに尋問され、肉体的にも精神的にも疲れる一日だった。

ちよつと熱めのシャワーが気持ち良い。部屋にはエアコンも効かせてあるから、風呂上がりのドリンクは格別なんだろうなっひゃあっ!?

背中に何かが当たった。後ろに何かいる。何かって、美月しかない。昨日も風呂についてきたじゃないか。疲れていたせいか思いつきり油断していた。

振り返ると、確かに美月がいた。そして俺は全速力で前を向き直す。裸だった……。

小振りだけどぶつくらした胸に、白くて線の細い体。お、女の子

だ。

「な、何してんだお前！」

「プリンのお礼です。背中、洗ってあげますね」

「いいっ！ そんなのいいから部屋に戻ってろ！」

「遠慮なんていいんですよ」

思わず前屈みになった。頭一つ分背の高い俺の首を洗おうと背伸びをしているのか、「うんしょ」と声が聞こえて背中にふにとした感触が伝わる。そのさきにちっちゃいてんがふたつううわわっ！

「うわあああっ！」

美月を見ないようにして振り返り、「きゃっ」無理矢理外に追い出した。

ダメだダメだダメだ！ 俺には明日美がいるんだから。付き合っ
てはいないけど。うん、死神とはいえ美月も女の子だし、こういう
ことはいけないのです！

「お礼なんですよー？」

外から話しかけてきたがシャワーの音で聞こえないことにした。

頭を冷やすために冷水シャワー。身震いして温水。お湯を止め、深呼吸を二回繰り返して部屋に戻る。

もんもんとした夜で、美月を意識しないようにするのがこのあと大変だった。

その美月はまったく気にした様子など見せず、ガシャンと、
「やりやがったな、美月……」

泣いた。

悲しみという感情を感じること涙が流れるらしい。

まったく、厄介な感情だ。特に危険な感情であることを推測する。
自制心も効かず、何を考えているのかわからなかった。

少し、こちらの世界に馴染んだようだ。

同時に、少しずつ人間に感化されていく。

その他、特に大きな変化は見られない。

三日目

「起きて下さい。七時ですよ」

今日は目覚まし時計じゃなく美月に起こされた。なぜならば美月の奴が俺の目覚まし時計を壊しやがったからだ。昨日あの後、テレビには見はまっていた美月は、とあるダンスユニットのダンスを見よう見真似で踊り、その際に、狙ったかのようなソバットが目覚まし時計にヒット。目覚ましは望んでもいないダイブを余儀なくされ、壁に激突。その肢体は砕け散り、「ジリン」と最後の言葉を残して逝ってしまった。ベッドの片隅には形見のベルが寂しく置かれている。

「はぁ……」

それを見て大きく溜息を漏らした。

「き、今日もいい天気ですよぉ？」

美月はカーテンを開けるが外は俺の心の涙が形となって現れていた。

「雨だな」

「と、時計ならここに」

今度はロードを突きつける。

「俺の命が減ってる……」

「あ……ち、朝食でも作りましょうか！」

「昨日全部使っちゃったよ」

「そうだった！ テレビで明るいニュースでも！」

『大変ですっ！ 世界大恐慌が訪れる可能性が出て来ました！ 繰り返します！ 世界大——』

プツツとな。

「俺の命の前に世界が終わるかもな」

それならっ！ と美月は部屋中で慌ただしく何かを探していた。
「いーよ。壊れちゃったもんは仕方ないし」

美月はしゅん、とうなだれる。申し訳ないとも思ってるのか？
わがままの限りは尽くすのに。

構っていたらまた学校まで走ることになるので早々に支度する。
雨も降ってるし。

行き掛けのコンビニでパンをプリンを買い、美月にプリンを渡すと「えへへ」と幼さを強調させて笑う。そんな顔されると憎めないんだよなあ。

そして登校中、見たくもなかったが猫が車に轢かれた死骸を見てしまった。目玉が飛び出て、頭は原型を全く留めないくらいに潰されていた。そこから目を逸らし、歩き出したところで、ふと思った。「なあ、俺って、どんな死に方するんだ？」

一応傘の中で隣を歩いていた美月は足を止め、少しだけ間が空いたあと、答えた。

「……わかりません」

感情の込められていない声だった。

自分の死に方がわかっていているのなら、ある程度覚悟できるかもと思っていたけれど。猫には悪いが、あんな死に方はしたくないな。考えると、悪寒が走った。考えるまい、自分の死に際のことなんて。

今日は池田にいろいろ聞かれることもなく、ごくごく普通に一日が始まった。

ただ、美月の様子が少しおかしかった。妙におとなしい。授業中もずっと何かを考えて、いや、悩んでいるようにも見えた。そのおかげで先生によそ見をするなど怒られてしまったけれど。

でも、なんとなく気になったんだ。

結局美月は午前中には話しかけてくることはなく、どこを見ているのかわからないような、ぼーっとした目をしていた。

それは、昼休みを迎えても変わらなかった。

「わーたーるー！」

昼休み、池田を昼食を食べていたところに天使のスマイル明日美がやって来た。

そうだ、美月のことなんかより明日美のことを考えないと。残された時間だつて限られているんだから。

「昨日、一人で『ルブラン』に行つたんだつてー？」

明日美は腰に両手を当て、栗色の髪を揺らし眉をひそめて言った。不満そうだ。

「行くなら誘ってくれてもよかったのにー」

言いたくても言えないもどかしさを感じたけれど、やっぱり話すわけにはいかず「衝動的に」なんて下手な誤魔化しをするしかなかった。

「ね、今日も行かない？」

これは嬉しいお誘い。今度は俺が奢つてやらないとな。なんて思しながら、

「あ……いや……」

俺は『もちろん』そう言つつもりだったのに何を口籠つてるんだ。さあ、言つんだ。

「今日はちよつと……」

おいおい、どうして俺は断るようなこと口走ってるんだ？ 美月と同じで俺までおかしくなっちまったのか？

「え？ 何か用事？」

「ちよつと寄るところがあつて……」

話してるのは俺か？ 俺なのか？ 怪奇現象だ。断る理由なんて何もないだろうが。

美月が何か悪戯しているものと思つて美月を見るものの、相変わらずぼーつとしていて何か力を使っている様子はない。

「そっか、じゃあまた今度ね」

えっ、ちよつと待つ……。

それは言葉としては出て来ず、明日美は残念そうに戻って行つた。

何やってるんだよ。自分が信じられない。寄るところは精神病院か？

「珍しい。何の用事？」

池田が物珍しそうに聞いてくる。「ちょっとな」そう答えるしかできなかった。

雨のおかげで湿気を含む暑さがジメジメと鬱陶しくあるものの頭がおかしくなるような暑さじゃない。俺は顔を洗って気持ちを落ち着かせようとトイレに向かった。

誰もいないトイレ。そこで数時間ぶりとなる美月の声を聞いた。

「明日美さんのお誘いを断るほどの用事とは？」

「……用事なんてない」

言いようのない気持ちだった。でも、声は落ち着いていた。後ろの美月はまた指を唇に当てているのか、気になって振り返ると、そうじゃなかった。

美月は俺の気持ちのように何とも言えない表情をしていた。困惑、というのが一番近いだろうか。美月は、ただぼーっと立ち尽くしていた。

「なあ、今日のお前おかしいぞ？」

「そうです、私、おかしいのです」

「ん、そ、そうだろ？ いつもなら例の癖でも飛び出しているハズなんだけどな」

美月は俺を見上げたが、その目は本当に俺を見ているのかわからなかった。

「私は……」

美月のか細い声は、男子生徒三人の談笑の声によってかき消された。俺は慌ててトイレを出て教室に戻る。それからは池田が放課後の予定を興味津々で聞いてきたので、美月と話をすることが出来なかった。

授業中に話せばいいかと思っていれば、手が届く範囲に美月がいなくて、落ち着いて話せるときは結局放課後になってしまった。

雨は上がり、アスファルトが夏の独特な雨の匂いを醸し出す中、俺と美月はとぼとぼと帰路についていた。

なんだかなあ。昨日までの美月ならパフェだのプリンだの騒いでいたと思うんだけど、こう、一言も話さないままついて来られると気持ち悪いと言うか落ち着かないと言うか。二人だけの空間で無言っていうのは騒がしいよりもいたたまれない。

そろそろ人通りも少なくなる住宅地で、俺は口を開いた。

「今日一日、一体どうしたんだ？」

足並みを美月に合わせて、歩きながら聞いた。

「……わからないのです」

わからないって、俺と同じ症状か？ 伝染病だな。人間用と死神用のワクチンが必要だ。

「あなたの最後が」

そこで美月は俺を見つめた。とても真剣で、俺は足を止めてしまふ。

「俺の……最後？」

「そうです。何故今まで気がつかなかったのか」

「意味がよくわからないんだけど」

たしかに今朝わからないって言っていたな。それで何に気がついたんだって？

俺が聞くより先に、美月は真剣な眼差しはそのまま話し出した。

「あなたの最後がわからないというのがおかしいのです」

わからないことがおかしい？ つまり、わからないといけないうてことか。美月は俺の最後を知っていなければならぬと？

「人の寿命は生まれた時にすでに決まっています。それはどんな方法を用いたとしても変えられません」

それが何の関係があるというんだ？

「我々の仕事はどういう仕事だと思いますか？」

「そりゃ死神って言うくらいだから、人を殺すことなんじゃないのか？」

「間違いではありませんが、正確には？肉体？と？ゼン？を切り離すことです」

「？ゼン？？」

「あなた方の言う魂と呼ばれるものが？ゼン？に当たります。？ゼン？というのは生命エネルギー、すなわち、肉体の原動力です。それが？ゼン？が肉体を離れることによって、この世において『死』を迎えたこととなるのです」

だから何を言いたいんだ？ 死神様のことを説明してんのか？

「人間が認識している『死』を肉体が迎えたあと、我々が本当の『死』を与えるのです」

「美月、懇切丁寧に説明してくれているところ悪いが、まるで話が見えないんだけど」

美月は思いつき顔をしかめて大きな溜息をついた。

「つまり、我々は人殺しなんて人聞きの悪いことをしているわけではないと」

「う、うん。まあ聞く限りはそうだな」

「……………」沈黙。

「……………」沈黙返し。

「今はそういう話じゃないでしょう！」

「お前が結論づけたんだろうが！」

思わず叫んでしまった。子連れの奥さまがお子様「見ちゃだめよ」の定型文。変なのは美月なんです！ って言ってもわかってもらえないんだもんなあ。

美月はやれやれと首を横に数回振って、続きを話し出した。

「肉体から？ゼン？を切り離す時、我々はその場にいない必要があります。そのためには肉体がどこでどうやって最後を迎えるか事前に知っておく必要があるのです。それは私とて例外ではありません。だから私にはあなたの最後が見えないといけないハズなのです」

なるほど、俺からその？ゼン？を切り離さないといけないから美月には俺の最後がわからないとおかしいと。

「どうやって最後のことを知るんだ？」

「頭に流れ込んでくるハズです」

「便利な機能だな。でも、何かさつきから違和感がある。なんとなく、はつきりしないで、曖昧で。ハズってなんだよ。自分の仕事のことくらいはつきりわからないと……て、仕事？」

「……そうか。」

「美月、お前の仕事はなんなんだ？」

「何をいまさら。私はあなたの観察役と言ったでしょう」

「それだけか？」

「そうです。私の仕事はそれだけ……あつ」

美月は猫が驚いたときのように目を大きく見開き、すぐに考え込むようにうつむいた。

「いや……しかし……一人の人間に我々が二個体もつくなど……」

「ありえないって？」

「その……ハズです……」

美月は自信なさげに弱々しく口にした。

「さつき言ってたよな。寿命はどんなことしても変わらないって。なら、お前の持つてるロードはどうなんだよ。俺の寿命を無理矢理縮めたんじゃないのか？」

「そういうことになりましたが……」

「なら例外ってことだろ。俺もお前も。何を悩んでいたのか知らないがそれだけのことだろ」

「そんな単純に……」

「俺にとつちやありえないことが起きてるんだ。そっち側でありえないことが起きてても不思議には思わないけどな」

美月はしばらく考える素振りを見せる。単純ならそれでいいさ。美月がここにいること自体が大きな不思議だ。これ以上驚くことはないし。

「あなたは単純でいいですね。そういうことにしておきましょう」
美月は相好を崩して、小さく笑った。

何の解決にもなっていないだろうけど、とりあえずの一件落着。
何となくほつと胸を撫で下ろし、コンビニでプリンを一つ。美月は無邪気に笑いながらそれを食べ終わると、指を立てて「もう一つ」。
俺も気分がスッキリしていたせいか、ついついもう一つ買ってやった。

「あなたは不思議な人です」

プリンを頬張りながら、美月は自分の常套句を吐いた。

「唐突だな。単純なことか？」

「認めるんですね？」

「違う……！ 何なんだよ……」

美月は目を細めて、ニヒルな笑みを浮かべて言う。

「私なんかに構ってないで、明日美さんと『ルブラン』に行けばよかったのに」

「は？ 誰がお前なんかに構って……」

……お、おいおいマジかよ。美月の言葉を心底否定できない。落ち着いて考える。どうして俺はここにいる。本来なら明日美と放課後デートをしていて、美月がパフェ食べたといって駄々をこねるのを必死でなだめていたハズだ。

それがどうした。今いるのはいつものコンビニ前で、目の前には嬉しそうにプリンを頬張っている美月。昼休みに明日美の誘いをどういうわけか断って、美月と話さないと思って思いながら話せないまま放課後になつて。『私なんかに構ってないで』だと？

美月の言葉が正しいのか？ はは、いやまさか……。
「どうしました？」

美月の唇に指を当てる癖を見て、自分でも気がつかないうちに笑っていた。

本当はわかってたんだ。この清々しい気分。今なら明日美の誘いを断ったりはしないだろう。

美月を放っておけなかった。だけど、断じて認めたくなかった。だってこれじゃ、まるで美月のことを大切にしてるみたいじゃないか。

こんな、出会って間もない、最大の不幸をもたらした美月のことなんて……。

スーパーで食材の買い物を済ませ、家に着くなりベッドに倒れ込んだ。今になって明日美の誘いを断った後悔の念が波のように引いては押し寄せる。

「はあ……」

「と、時計の代わりは私がしますから」

俺の視線の先には目覚まし時計の形見が置かれていた。

「それはいいんだよ」

「明日美さんのことなら明日にでも」

「明日も明後日も学校休み」

そう土日の連休だ。週休二日制が有難迷惑。予定はすっかりあるんだけど。

「休みならなおさら一日デートできるじゃないですかあ」

「そうだな。タイムリミットがかけられてなけりゃあな」

「それは……明日美さんのこと以外にも大切なことが？」

さすがに意味はわかるんだな。明日美のこと以外でもやることはある。死ぬことがわかってなかったら、明日美を遊びにでも誘っていたのかもしれないけれど。

「実家に帰るんだよ。学校休みの時くらいしか帰れないからな。最後に顔くらい見せておかないと」

「ついに私とのことご報告に。例え認められなくてもあなたと一緒になら……」

「止める。歯止めが効かなくなったかけおちカップルのように言うな。それにお前のことを話して頭がおかしくなったと思われたくない

い」

「頭は元々おかしいでしょうに」

そんなことを言った美月に枕アタック。それは見事に美月の顔面にヒット。ざまあみぶあつ！

お返しされた。美月はいんと笑ってほくそ笑んでいる。このくそがき。もういっちょお返し！ しようとしたら超能力で体の動きを封じられた。

「てめっ！ 卑怯だぞ！」

「ふふ、力を存分に使うことは当然のことですよ。正当防衛です。さあーで、どう料理して差し上げましょうか」

ゆっくりと美月が歩み寄ってくる。たかが枕投げなんかには本気になりやがってくそっ！

まったくすぐられるのは嫌だ。あれは地獄の苦しみだ。何とか脱出……ダメだ、全然全く体が言う事を聞かない。こ、このまま好きにされてたまるかってんだ！

「ぶ、プリン！」

ピタッと、美月の動きが止まった。俺を見上げて、餌を待つ子犬のように尻尾を振る。スカートがひらひらしてるのはほんとに尻尾じゃないよな？

「じ、実家の近くにうまいケーキ屋があるんだけどなあ。ショックを受けたら場所忘れてしまうかもなあ」

びくびくつと、今度は耳が反応する。器用な奴だ。

「ご出発の準備はなんなりとこの美月にお任せ下さい」

正座して、両手を膝の前に揃えて奥ゆかしく首を傾ける。人間に媚びる死神なんて、なんと滑稽な。

美月はそれから従順になった。風呂場にも入って来なかったし、晩飯の片付けもしてくれた。いつもこれくらい素直ならいいのに。

疑問を持ってしまった。

余計なことを話してしまった。

食欲というのも、随分と厄介な代物だ。

我々は高貴なる存在。

人間に媚びるなど、理解不能な行為だった。

すでにこの世界に慣れ過ぎているのかもしれない。

喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、全て不要なものなのだ。

あってもなくても困らない。

それが本来の我々なのだ。

四日目

今日は遅めの午前九時起床。

予定通りに実家へ赴くつもりだ。一泊して、明日帰って来る予定にしている。

「ふあーあ……」背伸びをして、血流促進。

「おはようございます。本日はよくお休みになられたようですね。さあ、まいりましょう」

従順美月はまだ継続中のようだった。柔和な笑顔がやけによく似合う。

「まあ待て。とりあえず支度もするし、朝飯も食べないとな。何か作ってくれよ」

ここぞとばかりに言いつける。普段わがままを聞いてやってるんだからこれくらいいいだろう。それに、こいつが作る料理の味付けは俺好みだったりするんだ。それもデータから得た知識なんだろう。死神じゃなくてメイドとしてやってきたなら、それはそれは役に立っただろうに。

「ち、朝食ですか？」

ぎくり、そんな音が聞こえてきそうなほどの動揺を見せる。また何かしやがったのかこいつ？

「そう。作れたよな。何でもいいから」

「え、ええ。そそそそうですね」

目を泳がせているのは人間にも死神にも言える何かやましいことがある証拠だ。

「何か、隠しているのなら正直に話した方がいいぞ」

「べ、別に何も。朝食の準備しますね」

美月は冷蔵庫の前に座り込み、「うーん」と唸りながら悩み出した。何を作るうか迷っているのか、それとも……。

そっと近づき、美月の背中越しに中身を覗いてみる。するとどう

したことだろう。冷蔵庫の中身は全て神隠しに遭っていた。全て、だ。まるでそこには最初から何も入っていなかったようにただの空間だけがあった。たしか三日分の食材は買ってきたハズなんだけどな。さてさて、中身のない冷蔵庫を見て何を悩んでいるのか美月。

「美月」

「ひゃっ！」

美月は膝をついたまま飛び上がり、カクカクと首を反転させた。百八十度。キモイ。

「さーで、俺の記憶が正しければ三日分くらいの食料が入っていたハズなんだけどな。俺の記憶違いかな。それとも記憶は正しく、俺が寝ている間に何者かによって平らげられてしまったのか、どっちだと思う？　ちなみにこの場合、何者かというのはもちろんお前のことを指す」

「き、記憶違いですよ！」

「お、おおそうか。だけど念のためいつも財布に入れているレシートを確認してみよう。本当に記憶違いならレシートなんてないはずだからなあ、美月」

美月は表面だけ笑顔のまま固まった。

「す、すみません！　申し訳ありません！　ほんの出来心なんです！　夜の暗闇の中異質な機械音を放つ宝箱が私を呼んでいて、開けると中から光とともに宝の山が！　止められないでしょう！　ここまで行くと止まらないでしょう！」

どうしようもなかったかのような弁解とともに頭を床にすりつけた。

「だからって全部食っちゃうやつがあるか！」

「す、すみません！　すみません！」

人間に頭を下げ必死に謝る死神。なんと滑稽な。

「もういいから頭を上げる。まったく、そんな小さな体によくもあれだけ入ったもんだ」

美月はゆっくりと体を起こし、人差し指をぴんと立てた。

「せ、説明しましょう！　そもそも食べなくても体の維持には支障がないので、体内に入った食べ物は異次元に消えてしまうのです！」
ズバーン！　そんな効果音が聞こえてきそうだった。

「なら、別に食べる必要なんてなかったわけだ」

「し、食欲と味覚はあるんですよ」

「つまりはただの贅沢だな」

「そ、そういうことになりますね」

美月の首根っこをガシツと、睨みを効かせてギラツと、ドスを効かせてズーンと。

「美月……」

「はいいつ……！」

「贅沢は……敵だ」

「な、ない肝に銘じておきます」

俺は大きく嘆息して、支度を始めた。

「荷物はそれだけですか？」

俺の格好は白い下地にわけのわからない英語が書かれたシャツにジーンズ。それに小さなショルダーバッグをかけているだけだった。
「着替えは実家に少しあるからな。暑いし、荷物は少ない方が楽だろ？」

「何だ、ただの面倒臭がりですか」

そう言った美月にデコピンを一発。喰らった美月はそのまま勢い良く吹き飛び、玄関のドアをすり抜け、何事もなく玄関から現れるといったいらぬ芸当を見せていた。

近くのバス停からバスに乗る。途中で一度乗り換え、一時間半ほどバスに揺られた先に俺の実家はある。

バスの中では美月がわーわーきゃーきゃー騒ぎまくっていた。初めてのバスで浮かれていたのだろう。バスの中から身を乗り出し（といっても窓は開けていない）、外の風を気持ち良さそうに受けて

いた。対向車が走って来ようとお構いなし。対向車は避けつつ風は受けるという高等技術。多分。

いつもはバスの中でゆっくり眺める地元までの道のりの風景も、美月が騒がしいおかげで落ち着いて眺めることができなかった。

山道を抜け、海が見えるともう近い。地元は港町で、でも山もある、田舎の町。少しの平地と山間部に家が建ち、海沿いを国道が走っている。島もあり、その島との連絡船は一日十本程度。汽笛が時計代わりにもなっていた。人口は一万人を軽く下回る小さな町で、近々隣町と併合されるって話した。

コンビニらしきものもあるが、夜十一時には閉まってしまい、その他の店も夕方を過ぎれば大体閉店してしまう。その時間を過ぎれば出歩く人はほとんどいなかった。子供頃の遊びと言えば、外を走り回るか家でゲーム。娯楽施設はおるかカラオケすらなかった。

それは今も変わらない。そして、潮風が香る、変わらない匂いだった。

「ん~~~~~……」

やっと着いた。窮屈さをほぐすために背伸びをして田舎の空気を肺に詰め込む。やっぱり通学は無理だったなと改めて思った。

降りたバス停はこの町では一番大きなショッピングセンターの前にある。小さいショッピングモールの略で『チビモ』と呼ばれて親しまれて?いた。『チビモ』に置いてある商品は世の中の流行りというものから一つ二つは遅れているものばかりだった。まあおそらくは流行りなんてものは、この町に住んでいる人は何一つ気にしないんだろうけど。俺もその一人だったし。

だけど、なんだかやっぱり居心地がいい。昔から変わらない店の並びとチビモの中の匂い。いつも決まった道順で歩いていて、自然とその通りに動く足。何を買うわけでもなく、一通り歩き回った。もう、ここに来るのも最後になるんだし。

ぐ~~~~~……。

そういえば、朝は何も食べていなかったんだっけ。

「プリンのお店はどこですかー？」

物欲しそうにプリンをせがみ、俺のシャツを引っ張るこいつのせいで！

「俺の食料を食い漁っておいてよく言えるな。この口か」

むいむいむいゝつと美月のほっぺを引っ張る。おー、よく伸びる。愉快な顔だな。

「いひやひやひや。ほえはほえ。ほえはほえれふ」

「わからん。日本語を喋れ」

（それはそれ。これはこれです。痛いです）

涙目になったところで、ようやく解放してやった。

「開き直りかこのやろつ」

「今のつねったことで帳消しでいいでしょう。甘んじて暴力を受け入れたのですから」

「ったくああ言えばこう言いやがって。プリンよりかメシだ。腹が減っては戦はできん」

「平和主義かと思っていました」が「何の話した。

どうせこのまま実家に行っても昼食の用意などされていないので、チビモ内の食堂で済ませることにした。営業しているのかわからないくらいに寂れているけれど、ここのラーメンは世界一うまいと思っっている。

食堂の中にはお客さんは誰もおらず、こそこそとテーブル席に着いた。店の中は今時珍しいブラウン管のテレビがニュースを流していた。

しかめっ面のおばちゃんにラーメンとおにぎりを注文し、週刊誌を読む。美月はこんな食堂で使うかわからない魚が泳いでいるでっかい水槽を眺めていた。ありや、鯛だ。

しばらく週刊誌を読み耽っていると、おばちゃんの親指が浸かったラーメンと黒ゴマがちょこんと乗ったおにぎりが出てきた。親指が浸かっていたことを見なかったことにしてさっそくラーメンに舌鼓を打つ。昔っから食べていたけれど、毎回具が変わるし、

チャーシューの代わりにハムが乗っかっている。だけどこれがうまいんだ不思議と。豚骨と鶏がらが合わさったような、あっさりしてても味がしっかりあるスープがうまい。

美月は目を輝かせ涎まで垂らしていたが、目の前に黒ゴマを一粒置いてやった。またぎゃーぎゃーうるさいものと思っていれば、涙まで流して、悔しそうに黒ゴマを噛みしめつつ「うう……」と唸っていた。ラーメンを凝視。食べにくいことこの上ない。

しかしこれもお仕置きだ。しっかりと惨めさを味わうがいい！
所詮この世では金を持つ者が強いのだ！ ふわっははは！

俺はスープまで飲み干して、満面の笑みと丼の底を見せてやった。
「ぐくく……！ な、何がなんでもプリンはいただきますから」
その執念だけは立派なもんだ。これでプリンまで渡さなかったら、俺はこいつに殺されるな。マジで。

さすがに可哀想だと思い、チビモの外の店並びにあるケーキ屋へ。ケーキ屋らしきものが周りにないためか以前からなかなか繁盛していた。洒落たケーキなんかはないけれど、それなりにおいしいのでお客受けは上々なのだ。幸いにもプリンは残っていて、家族の分も合わせて四つ購入。俺の周りを犬のようにちよろちよろ回る美月に「家に着いてから」と『待て』を言い渡し実家に向かう。

チビモから五分も歩かずに住宅地に入る。細い路地を抜け、車は通れない細い坂を上がり、俺の実家は見えてくる。坂を上がり切ると一見して切り立った崖が目の前に現れる。建てるのに苦労しただろうに、俺の実家はその崖の上に建っているのだ。崖を回り込み、人ひとりが通れる階段を上がり、我が森田家の玄関へたどり着く。多少不便な場所だけれど、見晴らしがよくて天気の良い日には二階のベランダから海を眺めていた。

今の時間、母さんは家に居るはずだけど……。
玄関のドアノブに手をかけ、蝶つがいが錆びて動きの鈍いドアを開ける。すぐに居間があり、母さんは大体そこでテレビを見ているのだ。

「ただいまー」

ドアを開けると、予想通りテレビを見ていた母さんがゆつと顔をこちらに向けた。

「あら、あんた帰って来るときは連絡しなさいっていつも言ってるでしょ」

毎度のことながらしかめつ面でのお出迎え。いくら俺が家族とはいえ、食堂のおばちゃんも、しかめつ面で客を迎えるのがこの町の伝統だっただろうか。母さんは、仕事もしておらず田舎の代表としていつも髪はぼさぼさ。着ている服もおばあちゃんかっているほど古臭い。ツンと吊り上がった目が性格を表しているかのようだ。かくいう俺も、母さん似ってよく言われていたんだけどな。

「そう言うなって。お土産もあるから」

とケーキ屋の箱を見せる。

「お土産って、それそのケーキじゃないの。どうせならこっちにないもの買ってきたさいよね」

買って来てやってただけありがたく思えってんだ！

「いやはや、外見も性格もよく似てますねえ」

美月が俺と母さんの間に立ち、俺と母さんを何度も見比べてにしと笑う。シカトだ。

「父さんと小夜こよは？」

「お父さんは自分の部屋。小夜ちゃんこよちゃんは友達と遊びに行ってるわ」
母さんはケチをつけた箱を探りながら、面倒臭そうに言う。

小夜こよっていうのは俺の可愛い妹だ。

「ちよつと、渉」

いかにも文句がありそうな口調だな。プリンばっかだとか言うなよ？

「プリンばっかじゃない」

性格が似てるからわかってしまうものなのか。そんなの嫌だ。

「嫌なら食うな。全部食うなよ？」

母さんは大きな溜息について動物を追いかうようにひらひらと手

を振った。本当に性格が似てるなら、俺って嫌な奴。

父さんに挨拶を済ませようと、父さんの部屋に向かう。父さんは家とは別の離れにある。離れと言うとちょっと聞こえがいいかもしれないけれど、昔、父さんのわがままで庭にあった池を埋めて、その上に二畳ほどの部屋を作った。昔は鯉なんかも泳いでいたんだけどな。

一旦外に出て、庭に周り父さんの部屋の引き戸を開ける。

その瞬間、意識が途絶えそうになった。

汗臭い。噎せ返る。吐きそう。それもそのはず。こんな真夏にエアコンもない狭っ苦しい部屋で窓も開けてないんだから。

「お、おお渉。帰って来たのか」

父さんは学生の頃からの趣味だというプラモデル作りに精を出していた。昔放送されていたロボットアニメのプラモデルだ。部屋の中には完成したプラモデルがジオラマとして所狭しと並べられていた。シンナーの匂いが少しきつい。こんな中にずっといたら気が狂いそうだ。

父さんは短パンだけの一張羅で全身汗だく。やっていることはまるで違うがスポーツ少年のような爽やかな笑顔である。母さんとは違い温厚で、怒ったところをあまり見たところがない。少し垂れ目で、口元はいつも緩い弧を描いていて人の良さそうな雰囲気滲み出ている。

「ただいま。せめて扇風機くらい回したらどう？」

「大切なパーツを失くしてしまうかもしれないだろう？」

「ま、まあそうだろうけど……」

しかしこの息が詰まりそうな匂いはどうにかならないものか。でも、こんな匂いの中でも美月は平気で部屋の中に入り完成したジオラマを眺めたり、触ったり……っておい！

や、やめろよ美月？ 間違っても壊すことなんてするなよ？ あわわ、も、持つな！ 戻って来い！ 戻ってくるんだ美月！ と願いが通じたのか俺の心配は取り越し苦労で済んだ。

「どれ、母さんに冷たいお茶でももらいに行こうか」

父さんは立ち上がり、

「おおっ？」

目眩でも起こしたのか、ふらふらとよろけて派手に尻もちをつき、その衝撃で美しいほど完璧にディスプレイされていたジオラマが渴いた音を立てて崩れ落ちた。

「うわあっ！ 僕の血と汗と青春の結晶があっ！」

半裸でプラモデルの前に泣き崩れる父親の姿なんて、友達には絶対に見られたくないな。

「汗かき過ぎだろ。そりゃ立ちくらみもするって」

「あ……ああ……」

ダメだなこりゃ。どうせ俺がいても邪魔だろうから「お茶もらってくる」と一言告げて居間に戻った。

母さんはまだまだテレビを観賞中だった。

「お茶冷えてる？」

「冷蔵庫。ついでにタオルも持ってってやんなさい」

テレビからは決して目を離さずだらけた声。しかしながら、さすがに父さんのことはわかっていているらしい。

「涉、あんた何かあったの？」

踵を返したところで、唐突にそんなことを言ってきた。

何かいつもとは違うことでもしていたかな。まさか、美月の姿が見えてしまったとか？ いや、それはありえないだろう。今まで特別に態度がおかしかったとも思えないしな。

「夏休みまでは帰って来ないと思ってたわ」

俺が帰って来たこと自体、普通じゃなかったってわけか。でも、もうすぐ死ぬから最後に顔を見せに来たなんて言えないよな。信じてもらえるはずがないし。

「暇だったただだよ」

普段通りに話したつもりだった。

「暇なら勉強でもしてなさいよ」

そう、これならいい。こういう感じがいつもの母さんだ。

「それでも結構毎日大変なんだよ」

「そういうことは成績が上がったら聞いてあげるわ。元々馬鹿なのに背伸びなんてするから今大変だと思うのよ」

「合格した時は大喜びしてたくせに」

「忘れたわ。さっさとお茶持つてつてやんなさい」

まったく、そんなんだから俺もこんな……いや、似てないはずだ。だけど、今日くらいは親孝行しないとな。

父さんは、崩れたジオラマの修復作業に一生懸命だった。この暑さの中、その情熱は素晴らしい。だがやはり汗臭い。せめて居間でやればいいのと思ったけれど、母さんから追い出される姿が用意に想像できたので口には出さなかった。

お茶を置いて父さんにタオルを渡すと、一旦手を止めて「ふう」と一息ついた。

「涉、学校はどうだ？」

「別に、変わったことなんてないよ」

「そうか。ちゃんとメシは食べてるか？ コンビニばかりで済まんじゃないぞ？ 小遣いもなくなってしまうだろう？」

「大丈夫。その、仕送りさ、もっと少なくてもいいから」

「気にしていたのか。せつかくお前が頑張つて入ったんだから父さんも頑張るさ」

仕送りは、十分過ぎるほどにもらっていた。それこそ、美月にメシを食わせていくらプリンを買つてやったところで生活には困らないくらいには。学生一人には、本当に必要以上の金額だった。

「将来立派になって、そうだなあ、有名な温泉にでも連れて行つておくれよ。なあに、父さんの先行投資だと思つてくれればいいさ」

将来、か。将来、将来、将来……。

「……ありがとう。日帰り温泉でもいいかな？」

「おいおい、せめて二泊三日だろう」

「息子にたかるなって」

父さんは、笑ってた。

その優しさが辛くなって、その場から逃げるように自分の部屋に向かった。

狭い階段を上がってすぐのドアを開けると俺の部屋。中学を卒業したときから何も変わらないで残してある。折りたたみのベッドと机。集めていた漫画が並べられている本棚と小さなテレビ。

少しだけ、埃臭かった。

バッグを床に置き、ベッドに座った。

「優しそうな方でした」

美月は俺の横に腰掛けてにつこりと笑う。

「あの母さんだからな。父さんみたいな人でバランスが取れてるんだろ」

「ふふ、そうかもしれませんね」

「父さんの部屋、すごい匂いだっただろ。よく平気だったな」

「入ってすぐ嗅覚を遮断しましたからね。まともにあの中にいたら発狂しますよ」

うげーっと舌を出しながら言う。何でもありだよな。でも、それくらい強烈な匂いだったってことか。

美月は興味深そうに部屋中を見回して、探索を始めた。お前は女子中学生レベルか。特に面白いものも置いていないので美月は放置と思ったら小中学校の卒業アルバムを発見された。小学校の卒業写真の俺と目の前の俺を見比べてにやにやとうすら笑みを浮かべる。

「この頃は素直そうで可愛いのにそれが今じゃ……」

そんなことを言った美月にアルバムの角アタック。頭を押さえて転がり回る美月が実に滑稽だ。愉快だ。わーははは。その転がる音に合わせて、階段を駆け上がって来る慌ただしい音が聞こえた。

そして勢い良く部屋のドアが開けられる。

「お兄ちゃん！」

妹の小夜が部屋に入って来るなり俺の胸に飛び込んできた。そのままベッドに押し倒される。

「こ、こら、小夜やめろって」

「うにゅーん。お兄ちゃんの匂い」

小夜は昔っから俺にべったりで、今の高校に行くと言った時には泣きつかれて大変だった。前に会った時は肩くらいまでだった髪だけれど、今は少し伸びてポニーテールを作っていた。頬ずりをして、その度に頭の尻尾が左右に揺れる。

「お前ももう中学生なんだから、こういうことはよしなさいって」

「やーだー。お兄ちゃんたまにしか帰って来ないんだからあ。小夜寂しいんだよ？」

まったく、まだまだ子供だな。

小夜は父さん似でいつも朗らかに笑っている。今年中学に上がったばかりで見た目はまだまだ小学生。小柄な体に乗っかられても重さはそれほど感じない。可愛い妹だ。

「プリン買ってきてるからお食べ。チビモの裏のプリン、好きだっただろ？」

「ほんと？ お兄ちゃん大好きい！」

ふふふ、可愛い奴め。

小夜の頭を撫でていると、美月がしらけた目で覗き込んでいた。

「妹萌えはないと言っていたはずなんですけどねえ」

違う、違うぞ。これは断じて妹萌えなどではない。妹萌えは妹がない奴が抱く幻想に過ぎないのだ。でも、まあ、小夜なら……。いやいや、俺は純粹に妹を大事にしているだけだ。

「お兄ちゃん、プリン食べよ？」

「あ、ああ。持ってきてやるから」

「うん！」「はい！」

一瞬、俺の時間が凍った。俺は小夜にどけてもらい、美月の腕を取った。

（お前も来い。小夜の前で食べるわけにはいかないだろ）

（わかりましたあ！）

おお、従順美月の復活だ。敬礼までして。どこまでも待ち焦がれ

たプリンだからなあ。

小夜を部屋に残し、階段の下にある冷蔵庫に向かう。
そこで緊急事態発生。

冷蔵庫を開けるとプリンが入った箱があった。箱を手に取り違和感。軽い……。俺の分は美月の分として四つ入っていたからそこそこ重量はあった。

恐る恐る箱の中を覗くとプリンが一つ。現実を疑いつつ冷や汗。

あ、あいつ……！

「母さん！」

居間のテーブルにはプリンの空が三つ、ピラミッドが作られていた。

「何よ、騒々しい。ドラマの再放送今いいところなんだから」

散々文句言っていたくせに三つも食いやがって！ ドラマ？ こ

っちはあんたのおかげでサスペンスドラマのの被害者になりそうだ！

「何で三つも食ってんだよ！」

「うっさいわねー。言われた通り全部食べてないでしょ。残りは小夜ちゃんの分。どうせあんたも父さんも食べないんだから」

迂闊……迂闊過ぎた。まさかこつも早くプリンが処理されてしま
うとは。

俺は返す言葉も見つからず、まわれ右をしてとことこ歩き階段の
下に立った。

「さて質問です。そのプリンを食べるのは一体誰なのでしょう？」

素敵な笑顔だった。

「こ、これはだな、美月、その……」

「あなたにとって苦渋の決断でしょう。可愛い妹にプリンがあると
言った手前、持って行かないわけにはいかない。でも、だけれども
だとしても！ 私もこの時をずっと待っていた！ そのプリンのた
めに黒ゴマ一粒噛み締めて耐えた昼飯どき！ それも全てはそのプ
リンのため！」

ズバツと、プリンを指差して言い放った。

「さあ、渡してもらいましょうか」

美月は獲物を狩る鷹のごとく目を光らせ迫る。それに合わせて俺が一步引いた。

「す、すまん！」

「あっ！」

俺は今までで最高の速さで階段の駆け上がった。

「小夜！ プリンだ！」

「お、お兄ちゃん？」

「ぶ、プリンを……」

俺の体は美月の特殊能力によつてすでに動きを封じられている。きょとんとしていた小夜は戸惑いながらもプリンを手に取り、蓋を開けて、

「いただきまーす」

可愛い口を開けてプリンを頬張った。ふう、任務完了だ。

「待ったあ！」

美月が叫ぶがすでに時遅し。小夜は「おいしい」とにこやかに二口目を放り入れた。

美月はそれを見て「あ……あ……」と驚愕と共に震え、

「嗚呼ッ……！」

嗚咽とともに糸の切れたマリオネットのようにその場に崩れ落ちた。

そ、そんなにか？ 楽しみにしていたとは思っけど、この世の終わりのような顔をして……。

いつの間にか美月の特殊能力は解けていて、俺はうなだれる美月の肩に触れた。

（美月、美月！）

（……なん……ですか……？）

い、今にも死にそうな声だ。

（わ、悪かった。けどほら、小夜を見てくれ）

美月はおもむろに重そうに顔を上げた。おう、号泣だ。声も出せ

ぬほどショックだったのか目に光がなく、涙だけが止めどなく溢れていた。俺は初めて美月に心底悪い事をしたと思った。いやもう、見ていられないくらいに悲惨な泣き顔で。

（小夜さんが……どうか……したの……ですか？）

（小夜の笑顔を見てくれ。まるでこの世の人全てが救われるような笑顔だろ？ お前のおかげなんだ。心から礼を言うよ）

（私の……おかげ？）

美月は小夜の顔を見て、呆けた顔で不思議そうに呟いた。

（そ、そうだぞ。美月が小夜を幸せにしてやったと言っても過言じゃない）

（わ、私が人を幸せに？）

嬉しそうにプリンを食べる小夜を、美月は顔を赤らめてぼーっと見ていた。

う、うん、微妙な罪悪感があるが間違いじゃないよな、よな？

（初めてです。こんな、暖かい気持ちは……）

そっか、こいつ……。

（……誰かのために何かをして、それで喜んでくれたんならそんな気持ちになるんだよ）

（素敵な……気持ちです）

胸に手を当てて呟いた美月の表情は、小夜の幸せそうな顔とそっくりだった。

「お兄ちゃん、何見てるの？」

小夜の頭を撫でると「うにゅーん」と嬉しそうに笑う。

美月が今感じているような、暖かい気持ちになることなんて最初で最後なのかもしれない。だって、美月に干渉できる人間は俺だけなのだから。今回は偶然だ。本当は誤魔化したことなんだし。美月が俺のために何かをすることなんて……ない。うん、まず、ないな。「おいしかったあ」

小夜はプリンの容器にティッシュを詰め、ゴミ箱に投げ入れた。その時、俺は見てしまった。美月の目の色が変わるのを。そして、

異質な空気が流れ出したのを感じ始めた。

「わ、私の……プリン……」

さつきとは違う意味で目に光がない。

「わ、私のお！ プリン……！……！……！」

こ、こいついきなりキレやがった！

いかんぞいかん！ このままでは直接的ではないにしろ小夜に被害が及ぶ恐れがある。

「さ、小夜、母さんに夕食の時間を聞いてきてくれるか？」

「うん！」

よ、よし、小夜は避難させた。さてどうしよう。

美月はおたけびを上げるがごとく「プリンー！」と叫んでいる。

プリンを今から買いに行く事は簡単だ。しかし、あそこのプリンがこの土曜という休日に売れ残っている可能性は皆無。行つてプリンがなければ店先で暴れかねない。

「み、美月落ち着け！」

「ウオオオオオオオ！」

ああ、まるで違う生き物のようだ。心なしか目から光が出て口から煙のようなものが出ている気が……。

何かないか、何か……。とにかく、何か餌を与えなければ、巨大猿にでも変身してしまうかもしれない。

「ち、ちよつと待ってる！」

俺は階段を駆け下り、冷蔵庫を開けた。中を見てもみるものの、飲み物や食材ばかりでプリンの代わりになるようなめばしいものは見つからない。次に冷凍庫を開ける。氷と冷凍食品が多数。だけどそこで見つけた。夏場にはいつも買い置きしてある、チューブアイス残り一本。色からして、オレンジ味。

俺はおれを握り締めて部屋に戻り、不可視のエネルギーを放ちながらおたけびを上げる美月の頬にそれを当てた。それが美月の動きをピタリと止めた。

「はぁ……はぁ……あ、アイスだ」

美月はぶるぶる震えながら「おお……」と感嘆の声を上げアイス
を掴みかぶりついた。

「……カタイ。オイシクナイ」

「馬鹿。真ん中から割って食べるんだよ」

俺がアイスを割って半分を美月に渡すと、すぐさまガジガジとか
じりつく。ほんとに獣だな。女の子らしさが微塵も感じられない。

「つ、冷たい！　おいしいです！」

やっと目に光が戻り、表情も柔らかくなった。

「半分もらうぞ」

美月は今にも飛び掛かりそうな勢いで俺が持つアイスに目を光ら
せたが、「プリンは明日の帰りにな」と言えば目をとろろんとにへ
ら笑いを浮かべる。マジで子供の相手をしているようだ。物で釣ら
れるところなんてそうだろ。食べ物だから動物の方が近いかな。

「お兄ちゃん！」

一階から小夜が叫んだ。そういえば、夕食の時間を聞くように言
ってたな。

「はい」

部屋のドアから顔だけ覗かせて返事をする。

「お母さんが下りてきなさいってー」

あー……何だよ面倒くさい。母さんのおかげで大変だったっての
に。また面倒事か？

アイスを急いで食べ終えて下りて行くと、母さんはキッチンに立
っていた。

「夕食の支度、手伝いなさい。あんたのおかげで一人分余計に作る
んだから」

一人分増えても手間は変わらんだろうに。人使いが荒いな。った
く。

「何すればいい？」

「お米研いで。そのあと皿うどん作ってお味噌汁。あとは軽くサラ
ダ」

「ってそれ全部俺任せだろ！」

「あたしは茶碗蒸し。火加減命なのよ」

何が火加減命だ。ただ楽しただけだろうに。

「たまには親孝行なさい」

親孝行……。母さんは冗談のつもりだっただろうけれど、その言葉が胸に突き刺さった。今まで親孝行らしいことをした記憶はない。そうなんだ、こんな母さんでも今まで俺を育ててくれた。今では母さんよりも背が伸びて料理だってできるようになった。

「ったく、わかったよ。茶碗蒸しは作り方わからないけど、他は全部やるから」

母さんはしかめっ面で、

「あら、どういう風の吹きまわし？ お小遣いならあげないわよ？」

「違うって。……お、親孝行だから……」

カアアツと体中の血液が顔に集まる。言って照れ臭くなった。

「ぷっ……！ あっははは！ あ、あんたが親孝行！？ 天変地異の前触れだわ！」

「わ、笑うなよ！」

「だってまさか……！ あっはははははっ！」

「笑うなって！ あっち行ってる！」

「はいはい。あっはは……顔真っ赤よ。ゆでダコ追加かしらね」

「ぐっ……！ う、うるさい！」

「あー怖い怖い。それじゃ、頼んだわよ」

くっそ……。やっぱ言うんじゃなかったかな。

慣れない四人分の食事の用意。けっこう時間がかかってしまった。

「母さん、交代」

言われていた夕飯四人分を作り上げ、あとは母さんの茶碗蒸しを残すだけ。

「あら、上手ね。さすがに一年も一人暮らしだとこれくらいできる

ようになるのかしらね」

母さんは珍しく感心しつつ出来上がった料理を眺めていた。全てバツチリだ！

仕送りは十分だったし、食費を抑えようと自炊をしていたわけじゃない。ただ外食もコンビニも飽きがきて、自分で食べたいものを作るようになっただけだ。作るのは別に苦じゃなかった。ただ好きってわけでもなくて、ただ単に、生活の一部だった。

「茶碗蒸しは？」

「ああ、買ってきてるのがあるわよ」

……何？ 聞き間違いか？ 買い置きがあるだと？

「さ、夕飯にするから二人を呼んできてちょうだい」

こ、このやろっ……！

まあ、でも、最後の親孝行だ。これでいいのかもしれない。

いまだジオラマの修繕作業をしていた父さんと、何故か俺の部屋で宿題をしていた小夜を呼び、久しぶりに家族四人で食卓を囲んだ。テーブルには大皿に盛られた皿うどん（パリパリ麺）とサラダ。

あとは一人一人にご飯と味噌汁。茶碗蒸しは俺以外の三人分。全員が愛用の茶碗と愛用の箸を使っていた。

「さあ、たーんとお食べ」

自分が作ったかのように言っなよ、母さん。

「おっ、今日のシェフは涉だな？」

夕食時まで半裸の父さんが味噌汁の飲んで閃いたように言った。

「どうかな、ダシから取ったのは久しぶりだから……」

「うん、母さんの味に良く似てる」

母さんはふんっ、と鼻を鳴らして「まだまだよ」と笑う。小夜は「お兄ちゃんおいしいよ」と皿うどんを食べながらにんまり笑っていた。

父さんも、母さんも、小夜も、みんな笑って食卓を囲む。そう、俺の家族はこういう感じだった。温かい、幸せな家庭なんだ。

この中から、俺が消えてしまっただよな。

母さん、泣くかな？ 父さんにはここぞとばかりに怒られそうだ。

小夜は泣いて泣いて、泣き疲れるまで泣いてしまっただろうな。

ごめんな、小夜。

ごめん。父さん、母さん。

「お兄ちゃん、食べないの？」

「あつ、ああ、食うぞ、食うぞー。うまいだろ？ 今日のメシは」

「あんた、何泣いてんのよ」

母さんに言われて目元を拭くと、しつとりと指先が濡れた。

「さ、皿うどんの麺が口の中に刺さったんだよ」

「痛そう。お兄ちゃん大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。ほら、食べよう」

ダメだな、笑わないとって思う程、気持ちは逆に沈んで行く。

「片付けも俺がやるよ」

食事を終えて、母さんが食器を下げようと重い腰を上げていた。

「そこまでいくと気持ち悪いわよ？」

「金輪際やらないかもしれないぞ？」

「それもそうね。しつかり働きなさい」

やれやれといった様子で、母さんは腰を落ち着けた。

「お兄ちゃん、小夜もするー」

「そうか。じゃあ一緒にやろうな」

俺が食器を洗って、小夜が一所懸命食器を運ぶ。

「小夜はお手伝い好きなんだなー」

「お兄ちゃんと一緒だもん」

良い子だなー、と俺は笑顔を作っていた。

「ね、ね、お兄ちゃん、夏休みはずっとこっちにいるんだよねー？」

俺はすぐに答えられなかった。どう答えるべきか迷ってしまった。

小夜が、あまりにも無垢な笑顔を向けてくるから嘘をつける気がしなかったんだ。

「いるよ」

俺にとって、重くて、これ以上ないくらいの、嘘だった。

「やったあ！　また海行こうね。川でもいいなあ。それでスイカ割り！　お兄ちゃん頑張って持ってってね？　明日美お姉ちゃんも一緒に！　あつ、でも宿題いっぱい出るかもだから、わからないところとか手伝ってね！」

……………やつべー。俺、今どんな顔してるんだろ。ちゃんと笑えてるんだろつか。

「小夜……」

次の言葉が続かず、追い払うように「お風呂に入っておいで」と小夜を遠ざけた。嬉しそうに風呂場に向かう小夜を見送って、食器を洗い続ける。

「お皿、割っちゃわないようにして下さいね」

美月が、俺の顔を見ないようにして言った。また自然に流れ出した涙を、袖口で拭った。なんとなくだけれど、美月は優しそうな目で、食卓の風景を眺めていたんだ。

視界がぼやける中で、食器を割って母さんからの大目玉なんて、それもいいかもしれない。小夜の箸に描かれていたアニメのキャラクターが消えかかっていた。今度新しい箸を見に行こうかと思っても、もう、俺はそれを小夜に渡すことはできない。

嫌なもんだな、死ぬのがわかってるっていうのも。だけど、できるだけ笑っていようと思う。

まだいいだろ。

俺の勝手かもしれないけれど、家族が泣くのは、もう少しあとでいい。

ちやぷん、風呂場の天井から、浴槽に水滴が落ちた。久しぶりの実家の風呂はゆずの香りだ。

「いい家族ですね」

「美月、毎度のことだけど、一人で入る風呂なのに前を隠さないといけないのはどうかと思うんだ」

「私は気になりませんけど?」

お湯に浸かる俺を、美月は立って見下ろしていた。

「俺のために気にしてくれ。それに風呂場にいるのにその服は変だ」

「脱ぎま——」

「出てけ」

「それはできません。見ているから変なのでしょう。私も入ります」

美月が服を来たまま浴槽に入ってくる。ただでさえ狭いの。それに、お湯が溢れるもののゴスロリ衣装が濡れている様子はない。

「便利でしょう?」

俺がゴスロリ服を見ていると、服をひらひら見せながら笑う。

何と言うか、お湯に浸かっているのに服が濡れていないんだから不思議で奇妙。そういえば、雨にも濡れていなかった気がする。じやあ何でこの前は裸だったんだよ。いや、思い出すな。意識してしまう。

年頃の男女が混浴なんて、普通なら胸躍るシチュエーションなんだろうけどな。

「何て言うか、残念」

「だから脱ごうかと……」

「とりあえずこっから出る」

無理矢理に、美月を浴槽から追い出した。

「まったく、文句の多い人です」

頼むから普通に風呂に入らせてくれ。

美月は風呂場の出入り口を向いてちょこんと座った。幾分かはマシだ。

「でも、その調子だと、大丈夫そうですね」

「ははっ、なんだ、お前のせいで死んでしまうのに俺の心配か?」

「別に心配など……。それに断っておきますがあなたを選んだのは私ではありませんからね。私が悪いわけではありません」

「今度は弁解か？　ほんとに変わった死神様だ」

「そういうことだと言っているだけです。私だって、申し訳ないと思つてますよ」

「……は？　申し訳ない？」

「いまさらだろ。そんなことはロードを起動させる前に思つて欲しいもんだ」

「たしかに、いまさらですね。少しだけですけれど、あなたの涙のわけが理解できました。悲しみを。あのときの私は何も知らなかった」

「なら最初っから知つていれば、こんなことにはならなかったとでも言つのか？」

「そうですね……いえ、どちらにしろ……」

「ま、そうだろうな。俺もいまさらこんなこと言つても仕方ないんだけどな」

お互いにしばらくの沈黙のあと、風呂場にはちゃぷん、とお湯の立てる音が響いた。

「大丈夫、なんてことは、ないんだよ」

言えば、負ける気がした。言えば、崩れてしまう気がした。何もかもが。

死ぬことが怖くないわけがない。

「実感……した」

「え？」

「改めて自分の親と、妹、家族を前にして。俺も含めて、家族なんだよ。正直、普通にしようとすることは、辛い。無理矢理に笑うのは辛いよ。だけどさ、最後の時間なんだから、嫌な空気で別れたくないんだ。何してんだとも思うよ。もつと他にすることがあるんじゃないかって。でも、そんなのわからないよな。あまりにも短かったから」

死ぬつていうことを、実感した気がした。

「……すみません」

……こいつがここまで素直に謝るなんてな。

「いーよ、別に」

「私を恨まないのですか？」

「お前が悪いわけじゃないんだろ？」

「そう言いましたが、ロードを起動させたのは私ですし……」

「じゃあ、やっぱりお前のせいだな」

「うつ……は、はい……」

顔は見えないものの、明らかに落ち込んでいる様がよくわかる。

「本当に、変な死神様だ」

「……………」

「十分に、人間らしいよ」

小夜は早々に寝てしまい、父さんは相変わらず、母さんはテレビを見ていたので自室のベッドに横になった。美月は、おとなしく座っている。風呂場でも会話が堪えたんだろうか。

美月に話しかけても、テレビをつけても、こいつはぼーっとしたままだった。

そんなあからさまに落ち込まれたらこっちが気を遣うつつの。

「あー……その、気にするなよ。お前のせいだとは思ってないからさ。それにさっきも言った通り、いまさらだし。落ち込んでたってしょうがないだろ？」

美月は俺の方を見て、訝しげに眉を吊り上げた。

「そんなことはどうでもいいのです」

そうそう、そんなのどうでも……なんだって？

「お前、今どうでもいいって言ったか？」

さすがにどうでもはよくないぞ。

「私が考えていたのはあの皿うどんというものです。とろりとした餡にパリパリと歯応えの良さそうな麺。なぜ私の分がなかったのですか」

……にやろう。また食いもんのことが。たしかに俺の勘違いだったけどよ。

「作ってやらんでもない」

「えっ！ 本当ですか！？」

見たことが満面の笑み。

「しかしそれだと明日のプリンはない。どちらか選べ」

美月は呆気にとられた顔をしたあと頭を抱えてうずくまった。そして「うーんうーん」と人生の岐路に立たされているかのように悩む。

「一晩中やってろ。俺は寝るからな」

明日は、小夜と遊んでやろう。

それにしても美月が申し訳ないと思っていたことには正直驚いた。目の前のこいつを見ると本当にそうなのか疑ってしまうけれど。風呂場でも美月は、たしかに落ち込んでいたからな。

そしてやつぱり、美月も可哀想な奴だと思う。死神っていつても、笑って、泣いて、怒って、喜んで、人間そのものじゃないか。そして、外も内も女の子だ。

神様が閻魔様が知らないけれど、上の世界ってのも、残酷なんだな。

四日が過ぎた。

本日は記録、報告共に不可能な状況に陥る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5996x/>

七色の記憶

2011年11月18日03時19分発行